

都市計画道路事業富士見町線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

本町二丁目遺跡

2019. 11

香川県教育委員会

序 文

本報告書には、都市計画道路事業富士見町線に伴い発掘調査を行った香川県坂出市本町に所在する本町二丁目遺跡（ほんまちにちょうめいせき）の報告を収録しています。

当遺跡はかつての海岸沿いに形成された小高い浜堤に位置しており、すぐ北には江戸時代末に高松藩坂出藩主・久米通賢によって開発された坂出藩田跡が広がっています。発掘調査により、浜堤を構成する砂の中からは中世の土器が出土し、浜堤の形成や、坂出市街地の海岸線の変遷を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後もご支援賜りますようお願い申し上げます。

令和元年 11月

香川県埋蔵文化財センター

所長 西岡達哉

例　　言

- 1 本書は、香川県坂出市本町に所在する本町二丁目遺跡（ほんまちにちょうめいせき）の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した調査は、香川県土木部都市計画課から香川県教育委員会に依頼され、香川県教育委員会を調査主体とし、埋蔵文化財センターを調査担当として実施した。
- 3 現地での発掘調査期間及び担当者は次のとおりである。

平成 29 年度	期間	平成 29 年 7 月 24 ~ 27 日、11 月 2 ~ 7 日、平成 30 年 2 月 5・6 日
	担当	主任文化財専門員 木下晴一
平成 30 年度	期間	平成 30 年 11 月 12 日 ~ 12 月 18 日
	担当	文化財専門員 森下友子 嘱託 角野 煉
- 4 現地調査及び報告書作成にあたって、次の関係機関の協力や教示を賜った。記して謝意を表したい。
石丸恵利子（広島大学総合博物館）、坂出市建設経済部都市整備課、坂出市教育委員会文化振興課、地元自治会（順不同、敬称略）
- 5 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。第 1 章第 1 節・第 3 章第 2 節は木下が執筆し、第 3 章第 4 節は石丸氏から玉稿をいただいた。それ以外は森下が執筆し、編集を行った。
- 6 報告書で用いる座標系は、国土座標第Ⅳ系（世界測地系）を使用した。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。 SP 柱穴跡・小穴跡 SK 土坑 SD 溝状遺構 SX その他の遺構
- 8 土層・土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。

本　文　目　次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	5
第3節 調査体制・整理体制	6
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の成果	
第1節 土層	10
第2節 平成 29 年度の調査	10
第3節 平成 30 年度の調査	14
第4節 動物遺存体	30
第4章 まとめ	38

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

都市計画道路富士見町線は坂出市街地を南北に走る道路で、国道11号川津交差点より南は国道438号に接続する。坂出市の中心部に向かう道路として交通量も多く、片側2車線の道路として改築工事が進められ、国道11号川津交差点からJR予讃線までの整備は完了し、現在、JR予讃線より北の県道33号までの区間の工事が進められている。

JR予讃線以南の本路線改築工事については、平成13年度以降、複数回の試掘調査が行われ、その際に確認された文京町二丁目西遺跡の発掘調査が平成15年度と19年度に実施されている。文京町二丁目西遺跡は、坂出市街地に2列存在する浜堤（砂堆）のうち、南側の浜堤付近に立地する遺跡である。浜堤の上面は削平や攪乱を受けており、遺構や遺物は検出されなかつたが、海側に下っていく斜面上に古代の遺物包含層が形成されていた。また、浜堤の海側は浅海が中世以降に埋積されていく状況が確認された。

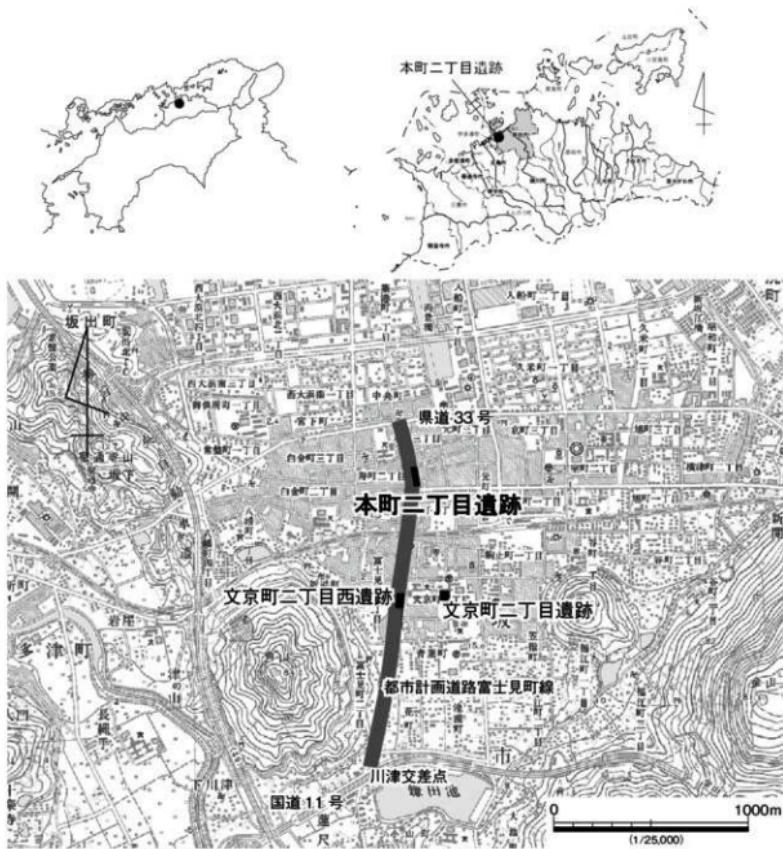
JR予讃線以北の改築工事については周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在しないことから、分布調査や試掘調査は実施せず、適宜工事立会による対応を行っていた。しかし、路線は坂出市街地に2列ある浜堤の北側のものを横切ることから、浜堤上に埋蔵文化財が所在する可能性が考慮された。

改築工事が進捗していた平成29年4月に工事担当の香川県中讃土木事務所へ公共土木工事照会し、道路端に敷設する水路の掘削工事の立会を行い、6月1日に浜堤付近の平断面観察を行った。観察場所はのちに試掘1トレンチ（平成29年7月調査）を設定した地筆である。観察時には地表から1.5m掘削されており、以北の工事箇所では見られなかった砂層が平断面に露出していた。砂層は中砂を主体とするものであったが、床面には1cm以下の礫層が部分的に見られ、ここから摩滅した中世の土器細片数点が採集された。この段階ではこの下に粒径の粗い浜堤の堆積層があり、その上面が一部露出していると考えた。

遺物が採集されたことから、浜堤上に遺構が存在する可能性が高いと考え、路線内の試掘調査を行うこととし、7月24～27日、10本のトレンチ調査を行った。対象地は南北約250mの範囲で、対象地北端から110mほどまで浜堤の微起伏が現地表に認められた。

1トレンチは、現地表面の微起伏から推定される浜堤の海側の境界付近に設定した。トレンチ北端付近に安山岩を積み上げた石垣があり、この北側では地表下1.2mの深さまで造成土や攪乱土が堆積し、標高マイナス0.5mで灰色のシルト層、グライ化した砂混じりシルト層が現れる。後者には微量であるがハマグリ、ウミニナ科の貝貝を包含する。石垣の前面には底幅1.0m、高さ1.0mの断面三角形に石材を積み上げていた。いわゆる波消しブロックで、この石垣は久米通賢による干拓以前の海岸線と考えられる。

石垣南側の2トレンチでは厚さ0.5～1.3mの攪乱・造成土の下に黄褐色の砂礫層が堆積していた。この砂礫層は中礫から中砂が上に向かって粗粒から細粒へと連続的に変化する級化構造を呈し、10～25cmほどの厚さを1単位とし、南方（陸側）に5～10度の傾斜で斜め下に向かっており、平面では陸側に凸の曲線を描いて複数層堆積していた。砂礫の円磨度は低い。堆積層の様相から暴浪時に海から巻き上げられた浜堤を構成する堆積物と考えられた（最初の工事立会時に掘削底面に露出していた粒



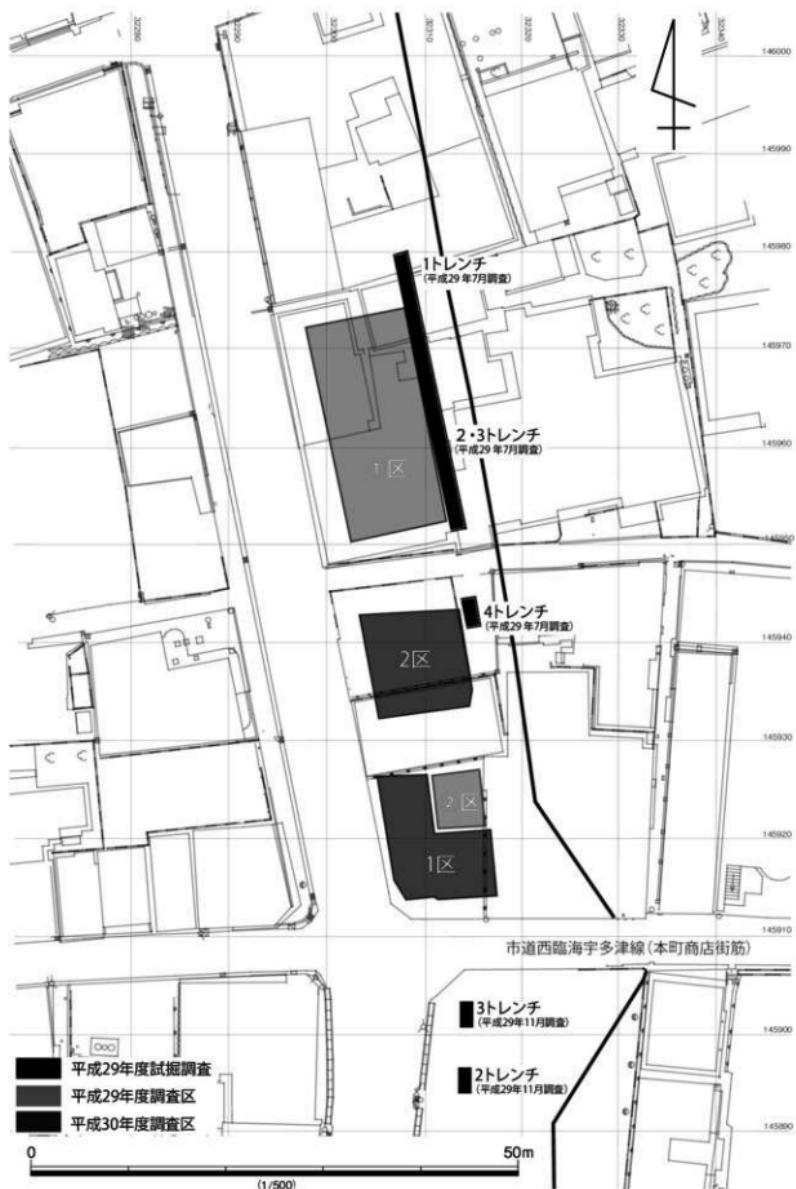
第1図 遺跡の位置

径の粗い堆積層は、級化構造をもつ1単位の砂礫層の下部に当たることが判明した)。浜堤堆積物のうちの粗粒(中礫)堆積物からは土器片が出土した。土器片は摩滅するものが多く、土師質土器小皿などが概ね中世に属するものであった。3トレンチも1トレンチと同様の状況である。

南側の協議対象地は、標高1.3~1.1mで浜堤背後の湿地にあたる。道路予定地の東側には駐車場が多く、連続するトレンチを設定すると通行に支障をきたす恐れがあったため、断続的に5~10トレンチを設定した。調査の結果、いずれのトレンチでも類似する堆積状況が確認された。現地表下1.0~1.2mまで搅乱・造成土が堆積し、その下には層厚20cmほどの黄褐色シルト混じり砂層、灰色砂混じりシルト質土層が堆積する。黄褐色シルト混じり砂層は、シルトから極粗砂が乱雜に入る淘汰不良の様相で、砂の円磨度は低い。浜砂と考えられる。この層の上面から15cmほど下の標高マイナス0.2m以下には貝化石が多量に含まれている。生痕化石は見られない。貝化石はイボウミニナに同定される巻貝を中心とした。



第2図 試掘調査の位置



第3図 調査区の位置

心に二枚貝のハマグリを若干量含む構成である。内湾砂底群集に属するものと見られる。遺構、遺物は見られなかった。

以上の結果から、1～3トレンチでは浜堤を構成する堆積物に遺物を包含していることが明らかとなつた。遺物の年代から浜堤形成時期や土地利用の状況が推定できると考えられ、事業実施に先立って埋蔵文化財の保護措置が必要と判断した。また、南側については保護措置不要であり、試掘調査を行わなかつた範囲は今後協議を行うこととした。

また、7月に試掘トレンチを入れられなかつた範囲についても、工事計画との調整の必要から早急な対応が必要であったため、11月7日に試掘調査を実施した。これらのトレンチを設定した地点は、現地表面の微起伏からみて浜堤が陸側に下がっていくところに相当する。調査の結果、標高0m付近まで擾乱を受け、その下には7月に試掘調査を実施した5～10トレンチで検出した浜砂層を検出したが、遺構・遺物は検出されなかつた。以上から、この範囲には浜堤堆積物は遺存せず、埋蔵文化財の保護措置は不要と判断した。

第2節 調査の経過

調査は3回に分けて行われた。1回目の調査は11月2～6日、試掘1～3トレンチを設定した地盤の調査を行った（①区）。香川県都市計画課による路盤改良工事が発注準備に入っていたため、4日間で調査を行つた。2回目の調査は平成30年2月5日、6日に坂出市水道局による下水道管設置の堅坑掘削に伴う本調査を坂出市教育委員会と合同で実施した。掘削地点は1～3トレンチの南側（②区）であるが、標高0m付近まで擾乱されており、遺構・遺物は確認されなかつた。3回目は平成30年11月12日～12月18日に南部の調査を実施した。排土置き場の都合上、調査区を南北に分けて、南を1区、北を2区と呼称した。また、1区と2区の間にはガス管が埋設され、擾乱が深くまで及んでいた。

調査に当たつては世界測地系を使用し、基準杭を打設した。現地での平面測量は基準杭をもとにトータルステーションを使用し、『遺構くん Cubic』（株式会社CUBIC）による図化を行つた。

また、平成29年度の調査にKCH、平成30年度の調査にKCH2の略号を使用した。出土遺物は遺構・層位・出土年月日ごとに袋または整理用コンテナに収納し、遺物登録番号を付け、台帳を作成した。出土遺物量は28リットル入り整理箱16箱である。

本町二丁目遺跡の整理作業は、発掘調査終了後から平成31年3月29日まで実施した。

第3節 調査体制・整理体制

発掘調査及び整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成29年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括

課長 白井道代

副課長 片桐孝浩

総務・生涯学習推進グループ

課長補佐 中川聰朗

副主幹 松下由美子

主事 山下詩織

文化財グループ

主任文化財専門員 信里芳紀

主任文化財専門員 乗松真也

平成30年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括

課長 白井道代

副課長 片桐孝浩

総務・生涯学習推進グループ

課長補佐 中川聰朗

副主幹 長谷川江里

主事 山下詩織

文化財グループ

主任文化財専門員 信里芳紀

主任技師 真鍋貴匡

香川県埋蔵文化財センター

総括

所長 増田 宏

次長 森 格也

総務課

課長 森 格也（兼務）

副主幹 斎藤政好

主任 高橋範行

主任 丸尾麻知子

主任 岩崎昌平

主任 横井隆史

調査課

課長 森 格也（兼務）

主任文化財専門員 木下晴一

香川県埋蔵文化財センター

総括

所長 西岡達哉

次長 時松弘志

総務課

課長 時松弘志（兼務）

副主幹 斎藤政好

主任 高橋範行

主任 丸尾麻知子

主任 木村義信

主任 横井隆史

調査課

課長 古野徳久

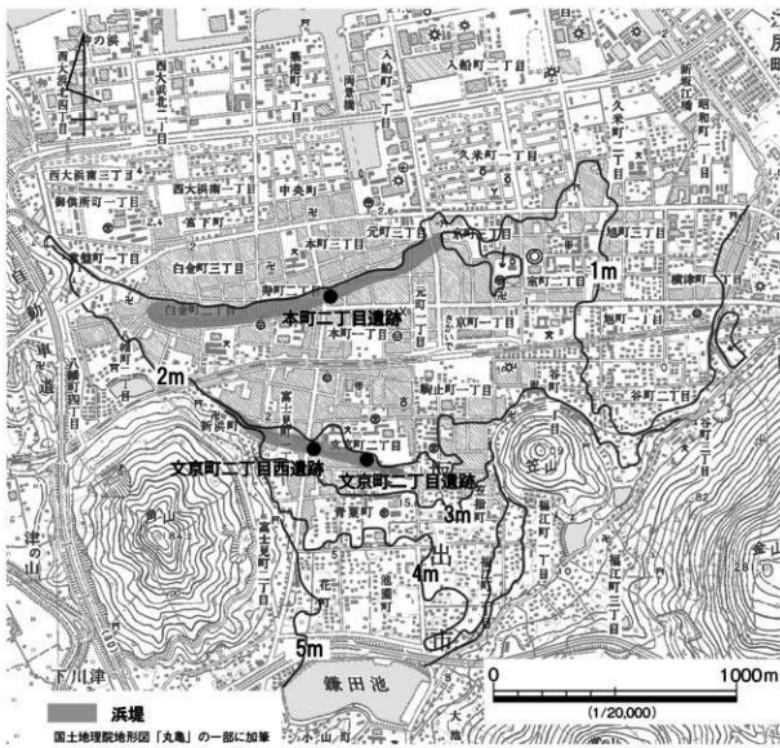
文化財専門員 森下友子

嘱託 角野 熊

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

坂出市街地の北部は江戸時代後期に高松藩の坂出惣田奉行である久米通賢によって開発された坂出惣田と呼ばれる干拓地が広がる。本町二丁目遺跡は干拓地の南に隣接しており、遺跡の北端には干拓以前の護岸と伝えられる石垣が残る。干拓前の姿は絵図「高松藩軍用絵図 阿野郡北絵図」⁽¹⁾・「坂出古図」(第5図)⁽²⁾などに描かれている。また、江戸時代末に坂出村の庄屋宮崎栄立が著した「民賊物語」にも戦国時代の坂出の様子が記されている。ここには「元亀二辛未歲奈良氏宇多津聖通寺山に城を築き累代居城とす。城東は入海にして角山の麓まで海潮つねに満干いたせり。角山の麓より三・四丁ばかり沖に出て、東西の寄州三十七、八丁ありてその東に南北の州在って横たわれり、海潮の満たる時、津郷、福江の大舟を往来せり、海の干たる時は海中の州を諸人ども往来せしとなり、遠近の違あること弓と弦のごとし」⁽³⁾とあり、聖通寺山の沖には東西の寄州があり、干満の大きな干潟が広がって



第4図 遺跡周辺の標高と浜堤



「坂出古國」
(公益財團法人鎌田共済会
擬土博物館所蔵)



坂出市都市計画図(1/2,500
平成4年作成)の一部に加筆

第5図 「坂出古國」と遺跡の位置

いたという。この「寄州」とは台風などの暴風によって浅い海浜の砂が吹き上げられて堆積した海岸沿いに形成される浜堤のことである。航空写真で坂出市街地の様子を観察すると、東西に走る浜堤が2列存在することがわかる（第4図）⁽⁴⁾。『民賊物語』に記された東西の寄州は角山の麓から3～4丁ほど沖に出ることから、北側の浜堤のことであろう。

本遺跡は『民賊物語』に記された「東西の寄州」、すなわち北側の浜堤に、本遺跡から南600mにある文京町二丁目西遺跡⁽⁴⁾や文京町二丁目遺跡⁽⁵⁾は南側の浜堤に位置している。文京町二丁目西遺跡の発掘調査では浜堤が海側に傾斜するところに堆積した包含層から8世紀を中心とする多量の遺物が出土した。このことから、南側の浜堤の形成は古代まで行われており、遺跡の北側には中世まで満潮時に海水が進入する湿地が広がっていたことがわかった。都市計画道路富士見町線改築工事に伴う川津交差点から文京町二丁目西遺跡の間の試掘調査では、海成層は認められなかったことなどから、この浜堤前縁は繩文海進時の海岸線に相当する可能性が高いことがわかった。

第2節 歴史的環境

本遺跡付近は江戸時代には阿野郡坂出村に含まれる。坂出村は江戸時代後期には港や整田によって発展するが、中世までは本遺跡の南 600 mまで満潮時に海水が進入する干潟が広がっていた⁽⁴⁾。

戦国時代から江戸時代にかけて坂出村が形成されていった。寛永 14 年（1637）に坂出村惣旦那衆が檀那寺である西光寺（宇多津町）に差し出した「宗旨檀那誓約覚」（西光寺文書）を見ると「うちはま」の政所市左衛門らや、「すか」の政所又右衛門らが連署しており、慶長 7 年（1601）ごろ播州から坂出への移住が行われたことがわかる。さらに、16 年後の元和 3 年（1617）に第 2 次の移住が行われ、これらの移民が寄州（北側の浜堤）を堤防として、塩田「内浜」「新浜」「宗徳浜」を開き、「州加」「内浜」に集落が形成されたと伝えられる⁽⁵⁾。「州加」は 3 つに分かれており、西から「西州加」「中州加」「東州加」と呼ばれていた⁽⁶⁾。これらは現在の坂出市八幡町・新浜町・白金町・寿町・本町・元町の一部で、北側の浜堤上に形成された集落である。本町二丁目遺跡は「東州加」に位置する。また、塩田「内浜」は現在の坂出市八幡町、通称「本街道」と呼ばれる市道の南側付近、「新浜」は坂出市白金町 1 丁目にあら坂出市立坂出小学校付近、「宗徳浜」は坂出市京町・室町付近に当たる。

また、寛文 7 年（1667）幕府の海辺巡見使高林又兵衛の著した『海上漆之記』に「サカイテ 百二拾軒 磯也」⁽⁸⁾とあることから、江戸時代初期には坂出には 120 軒ほどの集落が形成されていたことがわかる。この集落は北側の浜堤に形成された「州加」「内浜」の集落を指しているのであろう。

享保 17 年（1732）には林田浦から「西須賀八軒屋港」に舟番所が移された⁽⁹⁾。この港は第 5 國の「御供所新田」の南方、護岸がほぼ直角に屈曲するあたりで、現在の坂出市立坂出小学校のすぐ北の位置にあったと伝えられる。港や番所の整備にあたり、周辺の護岸工事も行われたと考えられるので、番所が移された 18 世紀前半には「坂出古図」（第 5 図）に描かれているような護岸が築かれていたと考えられる。また、この絵図には海岸線と角山北東側に集落、その間には塩田が描かれており、浜堤の上には集落があり、2 列の浜堤に挟まれた低位部には塩田や田畠が広がっていたことがわかる。

註

- 1 昭和 12 年に作成された写図が公益財団法人錦田共済会郷土博物館に収蔵されている。文化元年（1804）に開発された末包新田が描かれていることから、原図は文政元年から文政 9 年（1804～1826）に描かれたと考えられる。
- 2 公益財団法人錦田共済会郷土博物館所蔵。明治 45 年に坂出高等小学校の生徒が古老からの聞き取りをもとに描いた絵図である。小道の位置などが多少ずれているところもあるが、他の絵図と比べてもほとんど矛盾がないことから、信ぴょう性が高いと考えられる。
- 3 坂出市所蔵
- 4 木下晴一『木太中村遺跡 文京町二丁目西遺跡』香川県教育委員会 2009
- 5 「香川県埋蔵文化財調査年報 平成 12 年度」香川県教育委員会 2002
- 6 「坂出市史」坂出市 1952、藤田一郎「坂出村」「香川県の地名」1989
- 7 三木憲舟『綾北探訪記ノ内文政年間初期坂出村復元図』香川時評社 1968
- 8 「坂出市史」坂出市 1952

第3章 調査の成果

第1節 土層

平成29年度調査区の土層堆積状況については第1章で報告しているため、ここでは平成30年度調査区（1・2区）を中心に報告する。

北側の調査区である2区では砂利層の下に厚さ0.6～0.8mの造成土及び攪乱土が見られ、その下の標高0.7～0.9m付近に炭化物を多量に含む黒褐色小礫混り細砂・焼土が0.1～0.2mの厚さで堆積しており、この層の下面で江戸時代後期の遺構を検出した。その下には暗灰色砂質シルトブロックが混じる黄色小礫混り細砂が0.5mほど堆積し、さらに、その下（標高0～0.3m）には黄褐色小礫混じり細砂が堆積する。この黄褐色小礫混じり細砂層は①区で検出された浜堤堆積物と類似する。級化構造の堆積は確認できなかったが、浜堤堆積物の可能性が高い。西壁ではこの層の下部から15～16世紀の土師質土器小皿（13）、イイダコ壺（14）が出土した。この砂礫層の下（標高0.1m以下）には貝類を多量に含む黄橙色細砂層が堆積していた。

2区の南に位置する1区西部では深さ0.8～1.7mまで攪乱土・造成土が見られたが、東部ではほとんど見られなかった。東部では現地表下0.3m（標高1.0m）付近に近代の遺構面があり、土坑・石列が検出された。その下には黄褐色～褐灰色細砂が0.5mほど堆積し、さらに、その下の標高0.3～0.5m付近には暗灰色細砂、0.1～0.2m付近には炭化物を多量に含む黑色細砂が堆積していた。1区西部では攪乱土・造成土の下の標高0.6～0.9m付近に炭化物小ブロックを少量含む黒褐色小礫混り粗砂が堆積していた。これは2区の炭化物を多量に含む黒褐色小礫混り細砂層に連続するものと考えられる。その下にはにぶい黄色または黄灰色の細砂、標高0.3m付近に灰白色粘質シルト、その下の標高0.2m付近には炭化物を多量に含む黒褐色粘質シルトが堆積する。この層は1区西壁では見られなかった。1区南西部は攪乱が深く及んでいるが、攪乱下の標高0.3～0.5m付近で4条の溝（SD101～SD104）が検出された。また、標高0.1m付近には多量の貝類を含む灰黄色細砂層が堆積していた。なお、1区では浜堤堆積物と考えられる砂礫層は見られなかった。

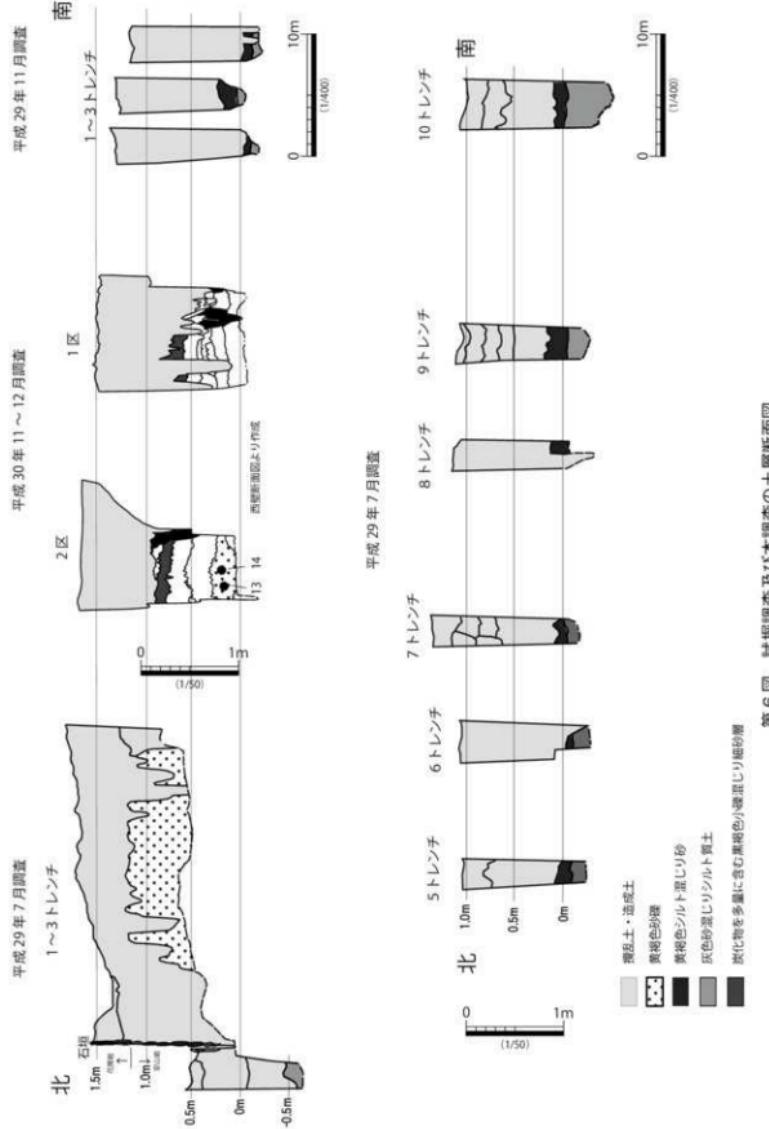
市道を挟んで南側の試掘調査（1～3トレンチ）では地表下1.2～1.4mまで攪乱・造成土があり、その下の標高0.2～マイナス0.1m付近には黄褐色シルト混じり砂、さらにその下には灰色砂混りシルト質土が堆積していた。その南の5～10トレンチも同様で、標高0～0.2m付近まで攪乱土・造成土、標高マイナス0.2～マイナス0.1m付近まで黄褐色シルト混じり砂、その下には灰色砂混じりシルト質土が堆積していた。

第2節 平成29年度の調査

平成29年度は試掘調査、遺跡の北部（①区）、平成30年度調査区の1区と2区に挟まれた部分（②区）の調査を行った。

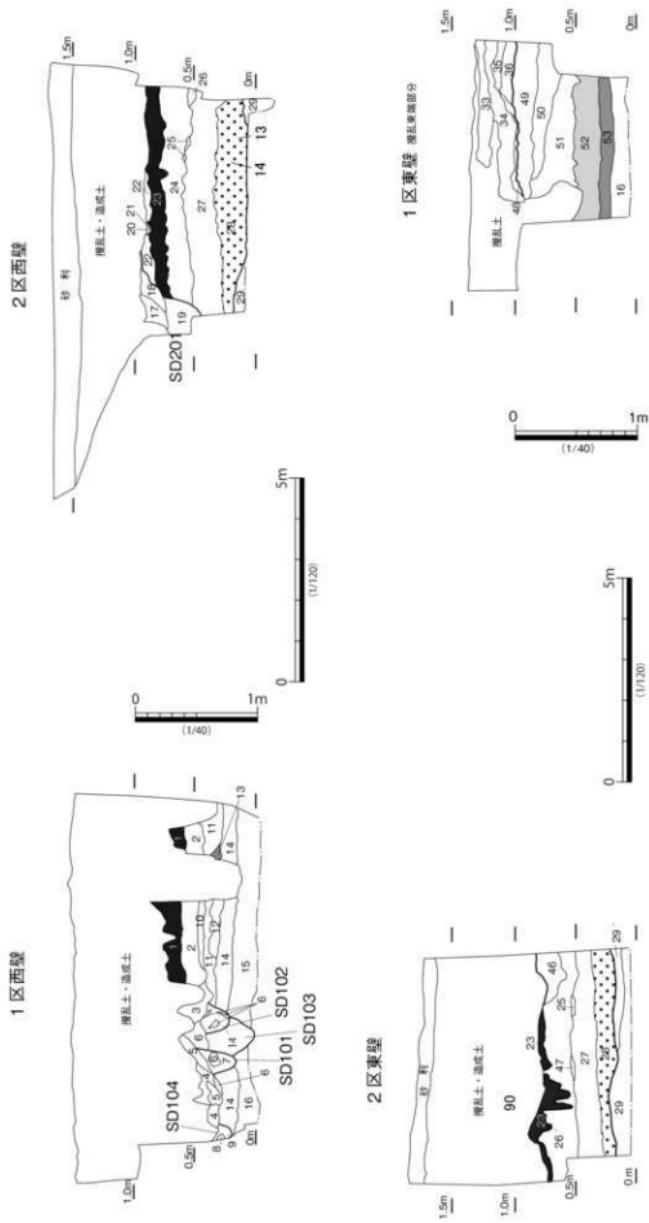
①区

対象地を東西に分け、半分を調査地、半分を掘削土置き場とし、西半分を調査したのち、東半分の調査を行った。試掘調査の段階では、標高0m付近以下は湧水があり、安全確保のため掘削していかなかつ



第6図 試掘調査及び本調査の土層断面図

第7図 平成30年度調査区西壁・東壁断面図



1 背景

- 1 2.5Y3/1 黄緑色(小)織り目地
 - 2 2.5Y3/1 黄色(小)織り目地
 - 3 2.5Y3/1 黄色(中)織り目地
 - 4 N/A 黄色背景シート
 - 5 10W4/1 白黒格子柄
 - 6 10W4/1 黒白格子柄
 - 7 10W4/1 白黒格子柄
 - 8 N/A 黄色背景シート
 - 9 2.5Y3/1 黄色(大)織り目地
 - 10 2.5Y3/1 黃緑色(大)織り目地
 - 11 2.5Y3/1 黄色(大)織り目地
 - 12 2.5Y3/1 黄色(大)織り目地
 - 13 2.5Y3/1 黄色(大)織り目地
 - 14 2.5Y3/1 黄緑色背景シート(溶剤化物を多量に含む)
 - 14 2.5Y3/1 黄色背景シート(小)織り目地(溶剤化物ブロックを少量含む)
 - 14 2.5Y3/1 黄色背景シート(中)織り目地(溶剤化物ブロックと化物を少量含む)
 - 14 2.5Y3/1 黄色背景シート(大)織り目地(溶剤化物ブロックと化物を多量含む)
 - 15 2.5Y3/1 黄色背景シート

三、反向激励

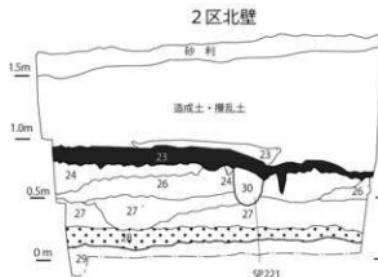
- 23 25Y3/1 黒褐色小鉢混じり鉢植（樹化物を多量に含む）
 - 25 25Y4/1 黒褐色小鉢混じり鉢植（樹化物を少量含む）
 - 26 25Y6/4 に黒褐色小鉢混じり鉢植（樹化物を少量含む）
 - 27 10Y9/7 に 黒褐色小鉢混じり鉢植（樹化物を少量含む）
 - 28 10Y9S/5 黒褐色小鉢混じり鉢植（樹化物を少量含む）
 - 29 10Y9/7 に 黑褐色小鉢紹
 - 29 10Y9/7 に 黑褐色小鉢紹シルト
 - 46 75Y8/6 桜小鉢混じり鉢植
 - 47 25Y6/1 黑褐色小鉢紹

3 因变量

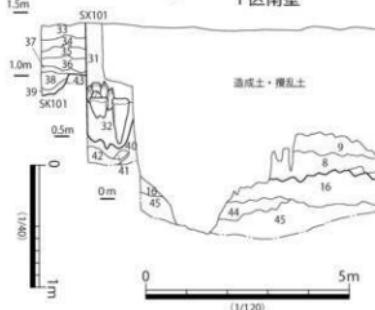
- 17) 10YR7/4 [褐色系色番シルト]
18) 10YR5/2 [黒褐色系色番シルト]
19) 10YR5/3 [黒褐色系色番シルト]
20) 10YR5/4 [黒褐色系色番シルト]
21) 10YR5/1 [黒褐色系色番シルト]
22) 10YR7/3 [にじく 黑褐色系色番]
23) 10YR7/7 [にじく 黑褐色系色番]
24) 2.5YR4/2 [黒褐色系色番]
25) 2.5YR4/4 [黒褐色系色番]
26) 10YR7/2 [にじく 黑褐色系 色番] [黒褐色系色番シルトブロックを少量含む]
27) 10YR7/2 [にじく 黑褐色系 色番] [黒褐色系色番シルトブロックを少量含む]
28) 10YR7/2 [にじく 黑褐色系 色番] [黒褐色系色番シルトブロックを少量含む]
29) 10YR7/3 [にじく 黑褐色系 色番]
30) 10YR7/3 [にじく 黑褐色系 色番]

1. 区域概

- 16 23YR/7 黄褐色系シルト
17 10YR/4 黄褐色系シルト
18 10YR/6 明褐色系粘土石墨ブロック混じり 10YR/6 黄褐色系シルト
19 10YR/1 黃褐色系粘土多量混じり 10YR/1 黄褐色系シルト
20 10YR/6 明褐色系粘土石墨ブロック混じり 10YR/6 黄褐色系シルト
21 10YR/5 黄褐色系シルト
22 10YR/4 黄褐色系シルト
23 N/A 黄褐色系シルト
24 10YR/4 黄褐色系シルト
25 10YR/4 黄褐色系シルト
26 10YR/4 黄褐色系シルト
27 10YR/4 黄褐色系シルト
28 10YR/4 黄褐色系シルト
29 10YR/4 黄褐色系シルト
30 10YR/4 黄褐色系シルト
31 10YR/4 黄褐色系シルト
32 N/A 黄褐色系シルト
33 N/A 黑褐色系 (腐泥化物・堆土ブロックを多量に含む)



1 区南駅



第8図 平成30年度調査1区南壁・2区北壁土壌断面図

たが、標高 0 m付近を境に上部が浜堤堆積物、下部が浜砂堆積物に分かれることが新たに判明した。このため西側の調査では浜堤堆積物中に含まれる遺物を採集しながら、浜砂堆積物上面を検出し、遺構検出を行ったのち、一部浜砂層を掘削して遺物が含まれていないことを確認し、調査を終了した。東側の調査では、この調査区で地表から断面図を作成できる地点が無かったことから、試掘トレンチを再掘削したのち、全体の浜堤堆積物を掘削して調査を終了した。

浜堤堆積物の断面をみると 10 ~ 25cm ほどの厚さを 1 単位とする砂礫層が陸側に 5° ほどの傾斜をもつて下がるもののが縞状に堆積している。1 単位は中砂から中礫の粒径の砂礫が明瞭な級化構造をもつていて、これを水平に切ると、中礫を外縁に内側に粒径が小さくなる陸側に凸の鱗状のものとなる。1 単位の平面的な規模は様々であるが、数m程度と見られる。砂礫の円磨度は低い。暴風波浪によって巻き上げられて堆積したものである。

砂礫層の最も粒径の粗い中礫部分に土器片が混在する。土器片は親指大から拳大ほどの大きさで磨滅している。なお、拳大のものは稀で、大半は親指大と拳大の中間の大きさである。検出状況から暴風波浪によって砂礫と共に巻き上げられたものと判断できる。これらの土器片は土師質土器杯(9)・土鍋(10・11)・羽釜(12)で、9 は 13 世紀後半、10・11 は 13 ~ 14 世紀、12 は 14 世紀末 ~ 15 世紀のものである。

浜堤堆積層の下に堆積する浜砂層は、黄褐色シルト混じり砂層である。シルトから極粗砂が乱雑に入り、淘汰不良、砂の円磨度は低い。この層の上面から 15cm ほど下の標高マイナス 0.2 m 以下には貝化石が含まれている。先述のとおり浅海底の堆積層と考えられる。遺物は含まれていない。

浜堤堆積層に含まれる土器片は、もともと近辺の波打ち際等に散布していたものと考えられる。つまり、近辺で居住等の土地利用が行われており、土器片の帰属する年代(13 ~ 15 世紀)に土地利用が可能な状況に発達していた浜堤が、のちに発生した暴浪によって新たな(現在見られる)浜堤に更新されたと解釈するのが妥当であろう。今回の調査区は地表から深く擾乱されていたため、現在の浜堤の形成時期や土地利用の開始時期は明らかにできなかった。

②区

擾乱土・造成土が標高 0 m付近まで及び、遺構・遺物は検出されなかった。

試掘調査

1トレンチ 江戸時代後期の護岸の北側にあり、干拓地に当たる部分で、陶器碗(1)が出土した。1 は肥前産の陶胎染付碗で、18 世紀前半のものである。

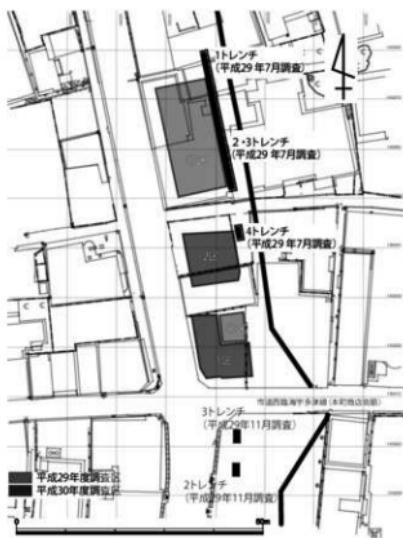
2・3トレンチ 擾乱土・造成土の下に堆積する黄褐色砂礫層の中からイイダコ壺(2)、土師質土器羽釜(3)・小皿(4)が出土した。3 は 14 世紀後半、4 は 13 世紀のものである。

4 トレンチ 砂中から土師質土器擂鉢(5)・陶器擂鉢(6)・羽釜(7)・土鍋(8)が出土した。5 は 14 ~ 15 世紀、7 は 14 世紀後半のものである。6 は備前焼で、灰色を呈する。15 世紀前半のものと考えられる。

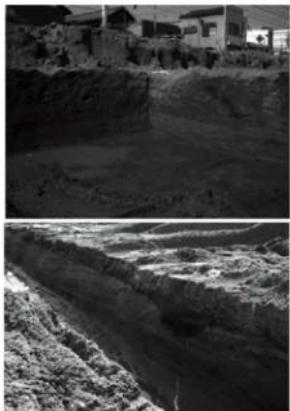
第3節 平成 30 年度の調査

1. 中世以前

2 区では標高 0 ~ 0.3 m に堆積する砂礫層(浜堤堆積層)から土師質土器小皿(13)、イイダコ壺(14)、土師質土器口縁部片(15)、土師質土器小皿(16・17)・杯(18)、須恵器椀(19)が出土した。13・14

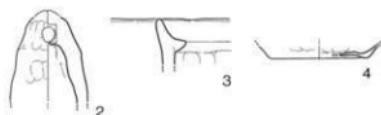


試掘調査（平成 29 年 7 月実施）
石垣手前 1 トレンチ 岬 2 トレンチ 北から



3 区土堆積状況 中：南東から 下：北東から

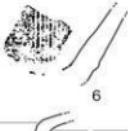
試掘調査 1 トレンチ出土遺物



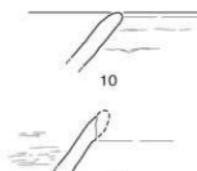
試掘調査 2・3 トレンチ出土遺物



6

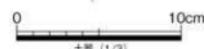


試掘調査 4 トレンチ出土遺物

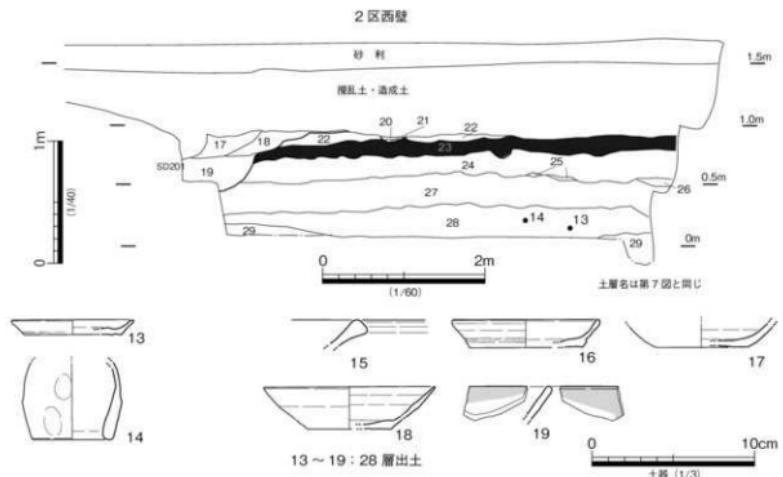


①区出土遺物

第 9 図 平成 29 年度調査の遺構・遺物



12



第10図 中世後半の遺構・遺物

は西壁から出土した。13は13世紀後半～14世紀前半、16・17は13世紀末～14世紀前半、18は13世紀後半、19は十瓶山産で13世紀のものである。15は江戸時代の土師質土器焙烙の口縁部片の可能性が高い。混入品と考えられる。

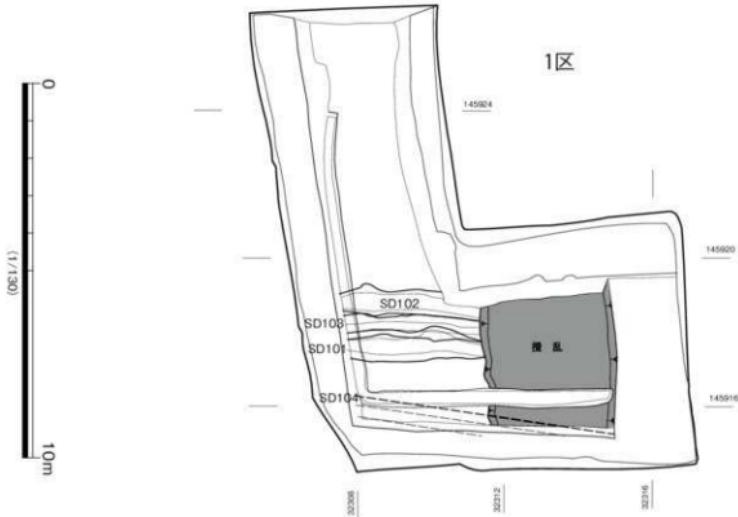
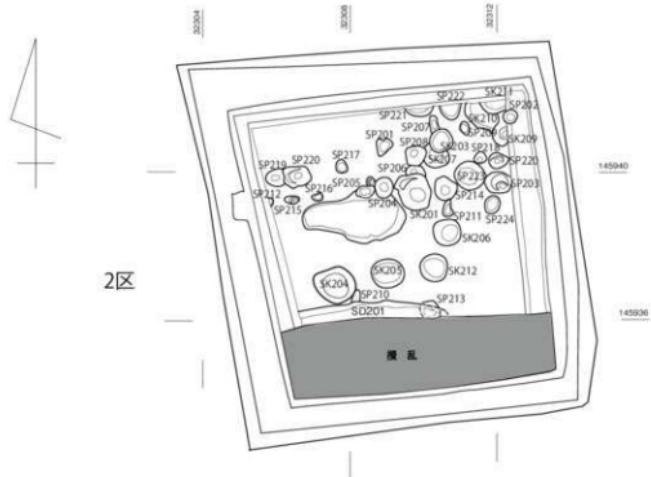
2. 江戸時代から明治時代初期

土坑

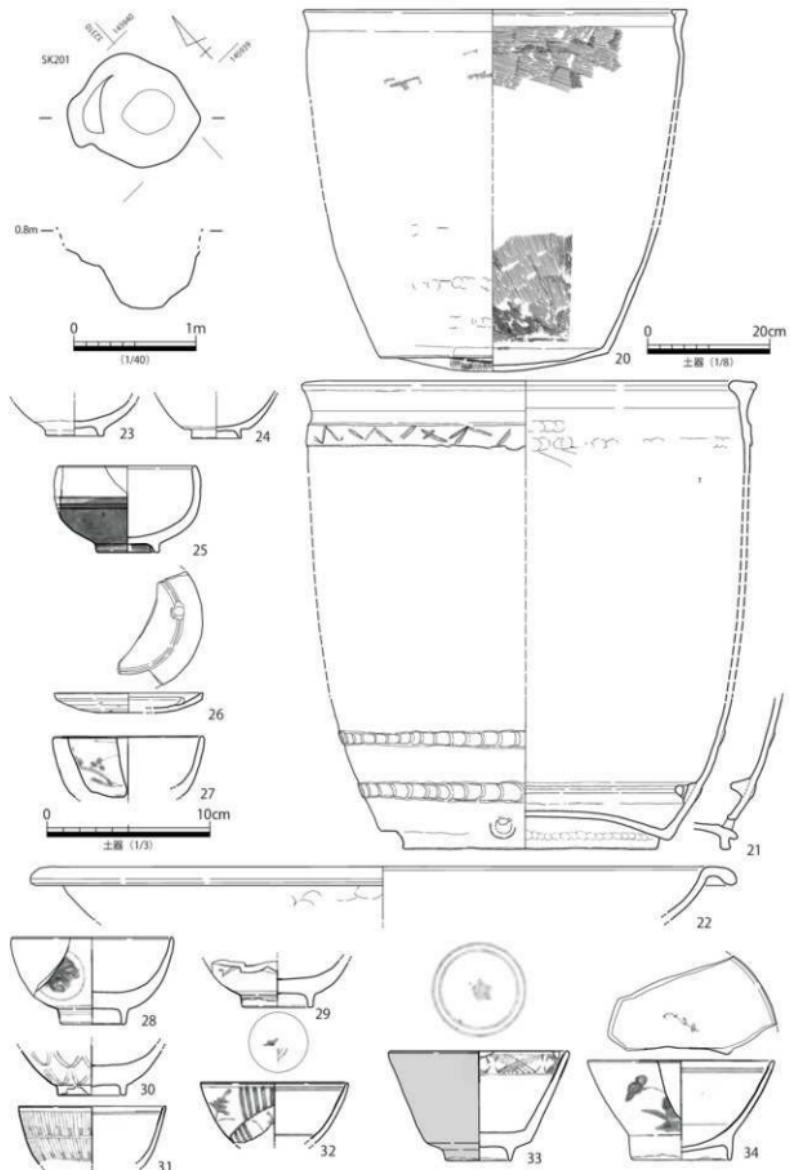
SK201（第12・13図）2区のほぼ中央、炭化物を多量に含む黒褐色小礫混り細砂（23層）上面で検出された。検出面での平面形はいびつな円形で長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.6m以上である。土坑の中からは風呂釜（21）、21の上からは土師質土器壺（20）が出土した。21は底には2つの脚があり、体部下部には孔があき、内面には棧がある。21の下からは土器・陶磁器片がぎっしりと詰まった状態で出土した。これらは土師質土器焙烙（22）、陶器碗（23～25）・灯明皿（26）、磁器碗（27～34）・皿（35）・鉢（36）・瓶（37）などである。23・24は京焼で18世紀、25は瀬戸美濃産で18世紀末から19世紀前半のものである。26は備前焼で、内外面には煤が付着する。27～30は肥前産で18世紀後半のものである、33は肥前産の朝顔形碗で、外面には青磁染付、底部内面にはコンニャク印判の五弁花文が施される。18世紀後半のものである。34は肥前系の広東碗で19世紀前半のものである。31・32も肥前系で、19世紀代のものである。35は肥前産で、外面の高台内には崩れた「渦福」、見込みには五弁花文が施される。18世紀後半から19世紀初頭のものである。36は肥前系で、口縁部が輪花である。37は葵筒底である。これらの陶磁器の時期は18世紀後半から19世紀代である。SK201は風呂釜を設置するため掘られた土坑であり、土坑底面から出土した陶磁器片の年代から19世紀代のものと考えられる。

SK202（第13図）2区の中央西寄りで検出された。平面形はいびつな椭円形で、長軸2.7m、短軸1.4m、深さ0.1mである。遺物はツメタガイ1点が出土しただけである。

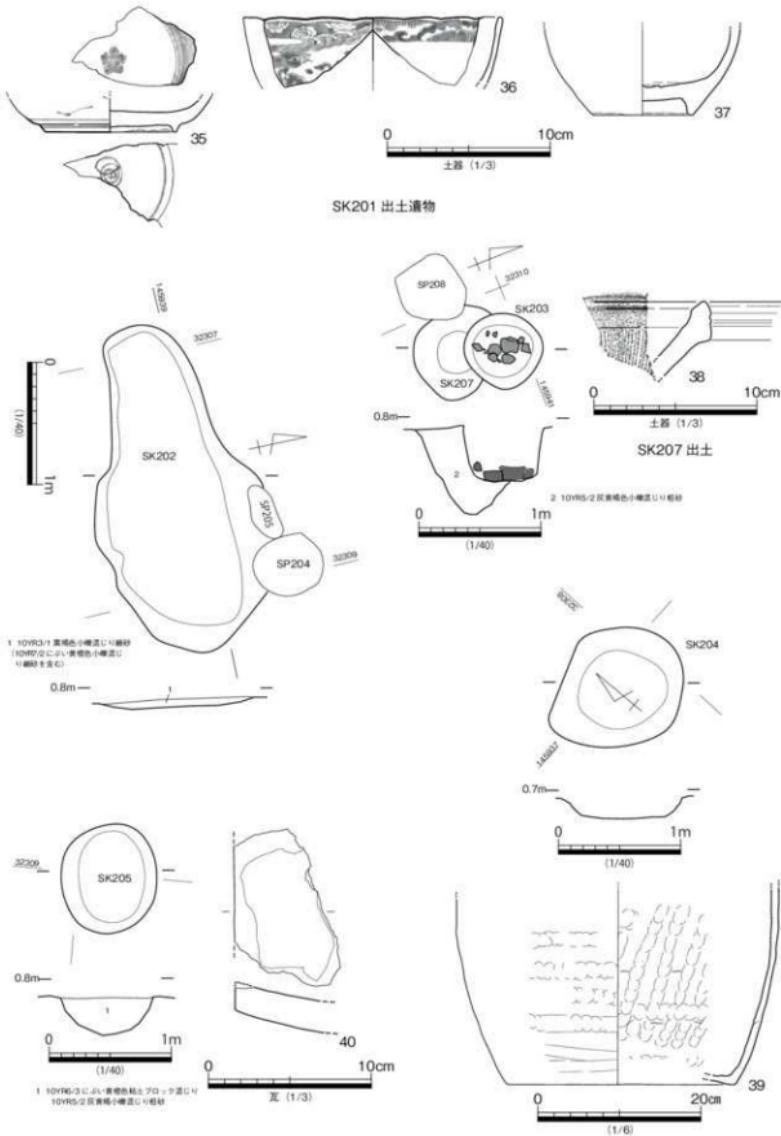
SK203（第13図）2区北東部で検出された。SK207と重複するが、SK203が新しい。SK203は平面形



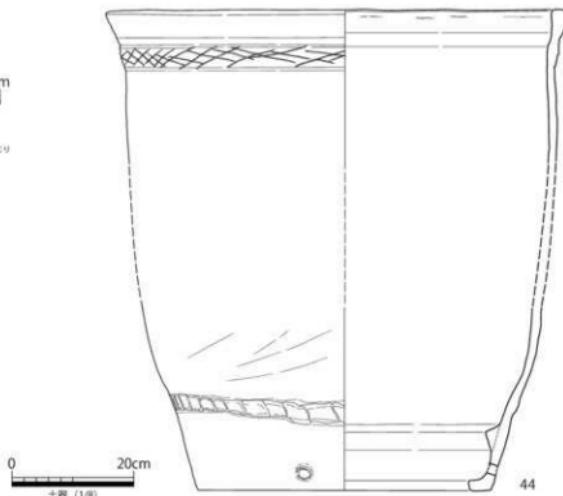
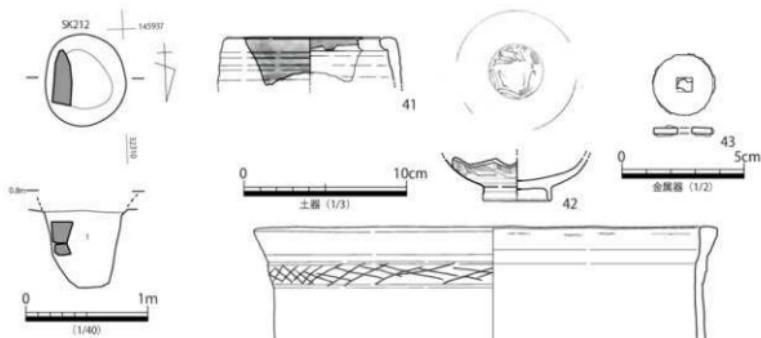
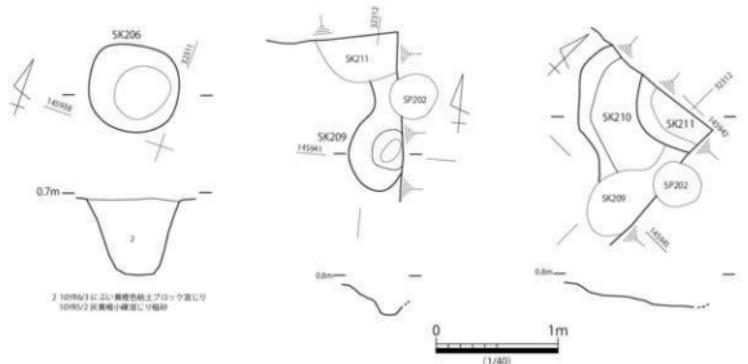
第 11 図 1・2 区全体図 江戸時代



第 12 図 SK201



第13図 SK201・SK202・SK203・SK207・SK204・SK205



第14図 SK206・SK209・SK210・SK211・SK212

円形で、径 0.6 m、深さ 0.4 m である。土坑の底には石塊が置かれていた。遺物は出土しなかった。

SK204 (第 13 図) 2 区南西部で検出された。平面形はいびつな円形で、長軸 1.2 m、短軸 1.0 m、深さ 0.2 m である。土坑底面からは土師質土器甕 (39) が底部を下に向けた状態で出土した。

SK205 (第 13 図) 2 区中央やや南寄りで検出された。平面形は楕円形で、長軸 0.9 m、短軸 0.8 m、深さ 0.3 m である。遺物は平瓦 (40) が出土しただけである。

SK206 (第 14 図) 2 区中央やや東寄りで検出された土坑である。平面形はややいびつな円形で、径 0.7 m、深さ 0.6 m である。遺物は土師質土器大甕の部品片が出土しただけである。

SK207 (第 14 図) 2 区北東部で検出された。SK203・SP208 と重複し、削平されている。平面形はややいびつな円形で、径 0.8 m 前後、深さ 0.7 m である。遺物は陶器擂鉢 (38) が出土しただけである。38 は備前焼で、19 世紀前後のものである。

SK209 (第 14 図) 2 区北東部で検出された。SK211・SP202 と重複し、削平される。平面形はいびつな楕円形で、長軸 0.9 m 以上、短軸 0.4 m 以上である。遺物は出土しなかった。

SK210 (第 14 図) 2 区北東部で検出された。北部は側溝に、東部は SK211・SK209 と重複し、削平されるため、全体は不明である。平面形は不明であるが、長軸 1.0 m 以上、深さ 0.1 m 以上である。遺物は出土しなかった。

SK211 (第 14 図) 2 区北東部で検出された。北部と東部は側溝によって削平され、全体は不明である。平面形は不明であるが、長軸 0.8 m 以上、短軸 0.4 m 以上、深さ 0.2 m 以上である。遺物は出土しなかった。

SK212 (第 14 図) 2 区中央やや南寄り、炭化物を多量に含む黒褐色小礫混り細砂 (23 層) 上面で検出された。平面形は円形で、径 0.7 m、深さ 0.7 m で、土師質土器風呂釜 (45) が置かれ、風呂釜の下の土坑東壁には塊石が置かれていた。風呂釜の下からは陶器香炉または火鉢 (41)、磁器碗 (42)、銅鏡 (43)、土師質土器甕風呂釜 (44) が出土した。41 は褐色釉が施される。42 は肥前系で、19 世紀代のものである。43 は腐食しており、文字は残っていない。44 は内面下部には棧があり、その下に孔がある。底部ではなく、筒状である。風呂釜の下から出土した陶磁器の年代から SK212 は 19 世紀代のものと考えられる。

柱穴跡・小穴跡

SP201 (第 15 図) 2 区北部で検出された。平面形はいびつな円形で、長軸 0.5 m、短軸 0.4 m、深さ 0.3 m である。土師器小片が 1 片出土した。

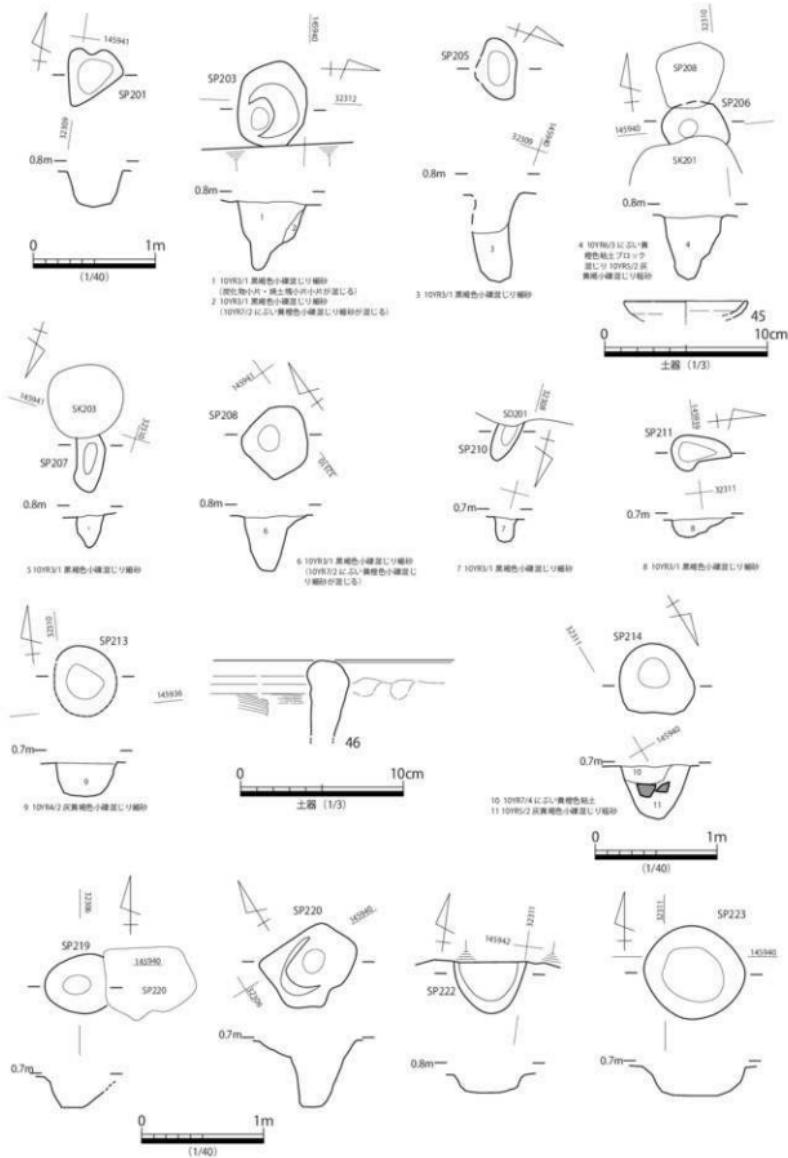
SP203 (第 15 図) 2 区東部で検出された。平面形はいびつな円形で、長軸 0.7 m、短軸 0.6 m、深さ 0.6 m である。土師器小片が 1 片出土した。

SP205 (第 15 図) 2 区ほぼ中央部で検出された。平面形はいびつな楕円形で、長軸 0.5 m、短軸 0.35 m、深さ 0.7 m である。遺物は出土しなかった。

SP206 (第 15 図) 2 区中央北寄りで検出された。SK201・SP208 と重複し、削平される。全体は不明であるが、平面形はややいびつな円形で、径 0.5 m 前後、深さ 0.5 m と推定される。土師質土器小皿 (45)、土師器小片 1、炭化物片 1 が出土した。45 は 15~16 世紀のものであるが、SP206 は江戸時代のものと考えられる。

SP207 (第 15 図) 2 区北東部で検出された。SK203 と重複し、削平される。全体は不明であるが、平面形はいびつな楕円形、長軸 0.5 m 以上、短軸 0.2 m と推定される。遺物は出土しなかった。

SP208 (第 15 図) 2 区中央やや北寄りで検出された。平面形はいびつな円形で、径 0.6 m、深さ 0.45 m である。遺物は出土しなかった。



第15図 SP201・SP203・SP205・SP206・SP207・SP208・SP210・SP211・SP213・
SP214・SP219・SP220・SP222・SP223

SP210 (第15図) 2区南西部で検出された。SD201と重複し、削平される。全体は不明であるが、平面形は楕円形で、長軸0.3m以上、短軸0.15m前後と推定される。遺物は出土しなかった。

SP211 (第15図) 2区中央やや東寄りで検出された。平面形はいびつな楕円形で、長軸0.5m、短軸0.2m、深さ0.15mである。遺物は出土しなかった。

SP213 (第15図) 2区南部で検出された。SD201と重複し、削平される。全体は不明であるが、平面形は円形で、径0.5m前後、深さ0.25mと推定される。土師質土器壺(46)、磁器片が出土した。

SP214 (第15図) 2区中央やや東部で検出された。平面形はいびつな円形で、径0.6m、深さ0.45mである。土師器小片・小皿片が1片ずつ出土した。

SP219 (第15図) 2区北東部で検出された。SP220と重複し、削平される。全体は不明であるが、平面形は楕円形で、長軸0.5m以上、短軸0.45m、深さ0.25mである。遺物は出土しなかった。

SP220 (第15図) 2区北東部で検出された。平面形はいびつな方形で、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.6mである。遺物は出土しなかった。

SP222 (第15図) 2区北東部で検出された。北部は調査区外に連続する。全体は不明であるが、平面形は円形で、径0.5～0.6m、深さ0.2mと推定される。遺物は出土しなかった。

SP223 (第15図) 2区北東部、炭化物を多量に含む黒褐色小砾混り細砂(23層)の下0.3mに存在する灰黄褐色小砾混じり細砂層(27層)上面で検出された。平面形は円形で、径0.7m、深さ0.2mである。遺物は出土しなかった。

溝状遺構

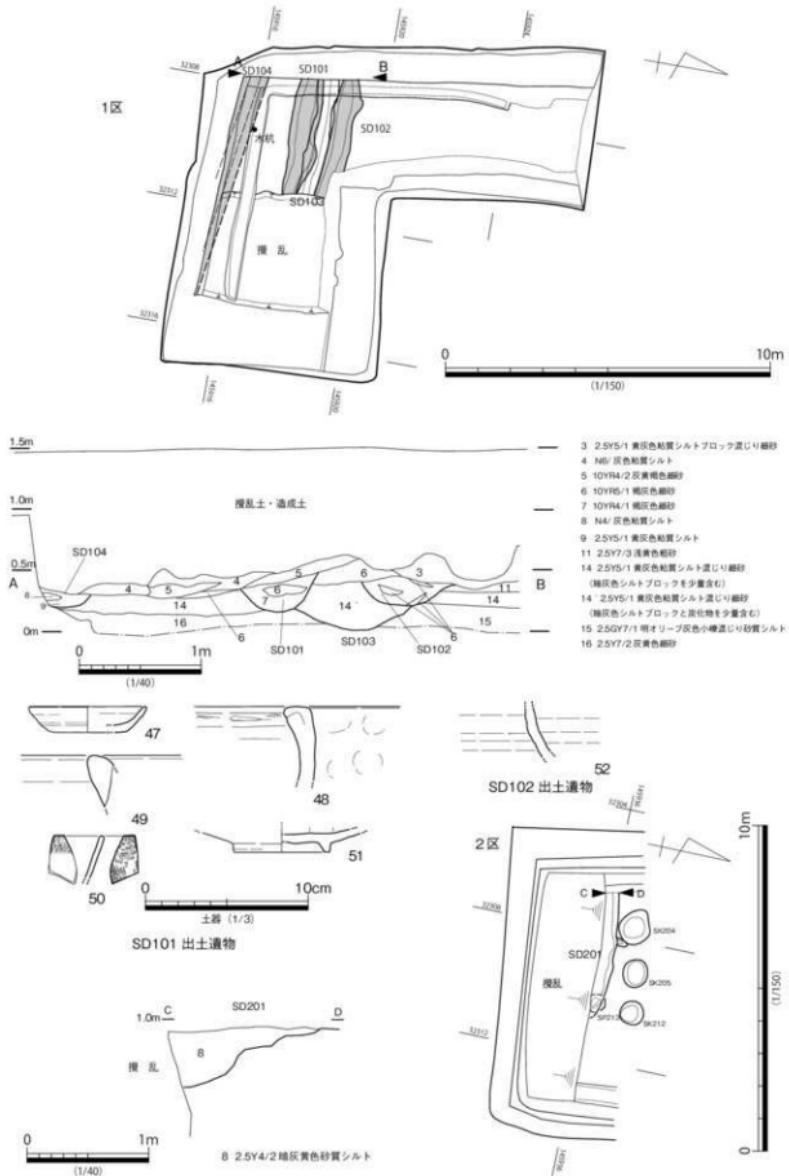
1区南部では4条の溝状遺構が検出された。これらは2区で標高0.7～0.9m付近に堆積する炭化物を多量に含む黒褐色小砾混り細砂層に連続すると考えられる黒褐色小砾混り粗砂層よりも下位から掘り込まれたと考えられる。いずれも出土遺物は少ないが、江戸時代後期のものと考えられる。

SD101 (第16図) 1区南部で検出された。検出面の標高は0.5mである。SD103と重複するが、SD101のほうが新しい。溝幅は0.6m、深さ0.3mで、東西方向に走る。東部は攪乱によって、削平されている。また、攪乱の東側の東壁付近でも検出されなかった。1区東部にみられる整地層(炭化物や焼土を多量に含む黒色細砂層)によって削平された可能性が高い。土師質土器小皿(47)・火鉢(48・49)、磁器碗(50)・皿(51)、土師質土器小片、サスカイト小測片が出土した。47は15～16世紀のものである。50は肥前系の型紙摺の碗で、明治時代のものである。51は肥前系で、見込み蛇の目釉剥ぎが施される。50は上部の攪乱土・造成土からの混入の可能性が高い。

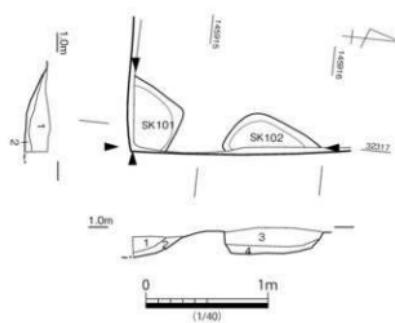
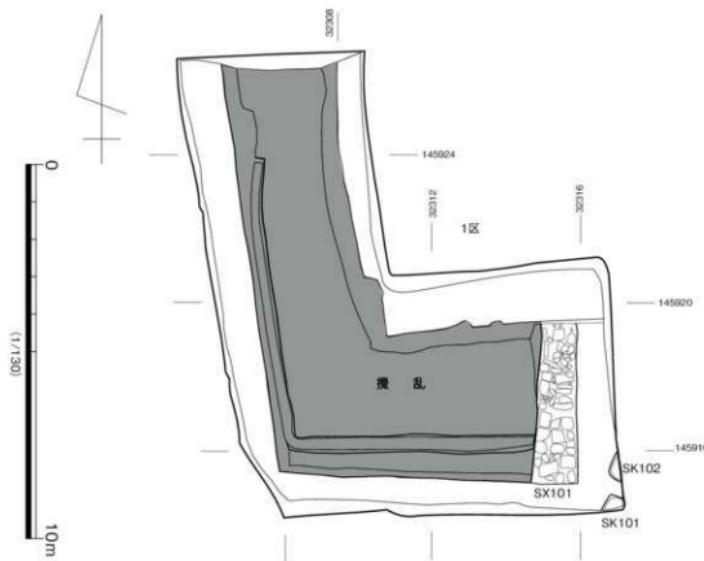
SD102 (第16図) 1区南部で検出された。検出面の標高は0.4mである。溝幅は0.7m、深さ0.2mで、SD101と平行に東西方向に走る。SD101と同様東部は攪乱によって削平されている。陶器壺の体部片(52)が出土しただけである。

SD103 (第16図) 1区南部で、SD101・SD102掘削後に検出された。検出面の標高は0.4mである。SD101とSD102と重複して、削平される。検出面での溝幅は1.0m、深さ0.4mで、東西方向に走る。貝類が4点出土したが、土器・陶磁器は出土しなかった。

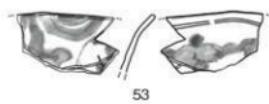
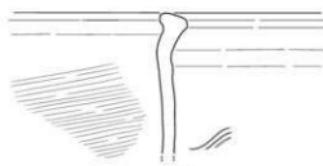
SD104 (第16図) 1区南端で、攪乱下で検出された。検出面の標高は0.4mである。南壁・西壁沿いに設定した側溝によって削平されており、断面で確認したとどまった。南部は調査区外に連続する。溝幅は0.4m以上、深さ0.15m以上である。溝の北端には径0.1mの断面形円形の木杭が1本垂直に打設されていた。遺物は出土しなかった。



第16図 SD101・SD102・SD103・SD104・SD201



1 7.5YR5/1 塗灰色細砂
2 混化物
3 7.5YR5/1 塗灰色細砂
4 炭化物



SK102 出土遺物



第 17 図 1 区全体図 明治時代以降



SX101 出土遺物

56

SD201 (第 16 図) 2 区南部で検出された。検出面の標高は 0.9 m で、整地層と考えられる炭化物を多量に含む黒褐色小礫混り細砂層 (23 層) よりも上位の掘り込みであることが調査区西壁で確認された。南部と東部は擾乱によって削平されており、ほぼ東西方向で、幅 0.7 m 以上、深さ 0.4 m である。SD201 は発掘調査前の地境に当たることから、地境を示す水路のような施設だったと考えられる。磁器片 2 点、土師質土器片 3 点が出土した。

3. 明治時代初期以降

1 区東部では現地表下深さ 0.3 m (標高 1.0 m 付近) で 2 基の土坑と 1 条の石列が検出された。江戸時代の遺物も含まれているが、明治時代初期以降のものと考えられる。

土坑

SK101 (第 17 図) 1 区南東隅、現地表下深さ 0.3 m (標高 1.0 m 付近) で検出された土坑である。調査区外に連続するため全体は不明である。平面形は隅丸方形を呈すると推定され、1 辺の長さは 0.5 m 以上、深さ 0.15 m 以上である。底面には厚さ 5cm ほどの炭化物層があり、上部には細砂が堆積する。遺物は貝類が 1 点出土しただけである。

SK102 (第 17 図) 1 区南東隅、現地表下深さ 0.3 m (標高 1.0 m 付近) で検出された土坑である。調査区外に連続するため全体は不明である。平面形は隅丸方形を呈すると推定され、深さ 0.2 m で、1 辺の長さは 0.7 m 以上である。底面には厚さ 5cm ほどの炭化物層があり、上部には細砂が堆積する。出土遺物は磁器鉢 (53)、平瓦片 2 点が出土した。53 は肥前系の型打ち成型による角鉢で、19 世紀前半のものである。割れ目には金継ぎの補修痕がある。

石列

SX101 (第 17 図) 1 区南東部、現地表下深さ 0.3 m (標高 1.0 m 付近) で検出された石列である。南端は調査区外に連続し、北端は擾乱によって削平されている。ほぼ南北方向で、幅 1.0 m 前後、長さ 4.0 m 検出された。石列は幅 0.3 ~ 0.4 m、長さ 0.3 ~ 0.4 m、厚さ 0.3 m ほどの石塊の間に小石塊が詰まっていた。石列の間から土師質土器壺 (54)、陶器碗 (55)、磁器碗 (56)、陶器片、レンガ片などが出土した。55 は京焼風陶器碗で、18 世紀前半のものである。56 は肥前系の型紙摺り碗で、明治時代のものである。発掘調査以前にはこの付近に店舗と公園があったが、SX101 付近が地境に当たることから、地境を示すものと考えられる。

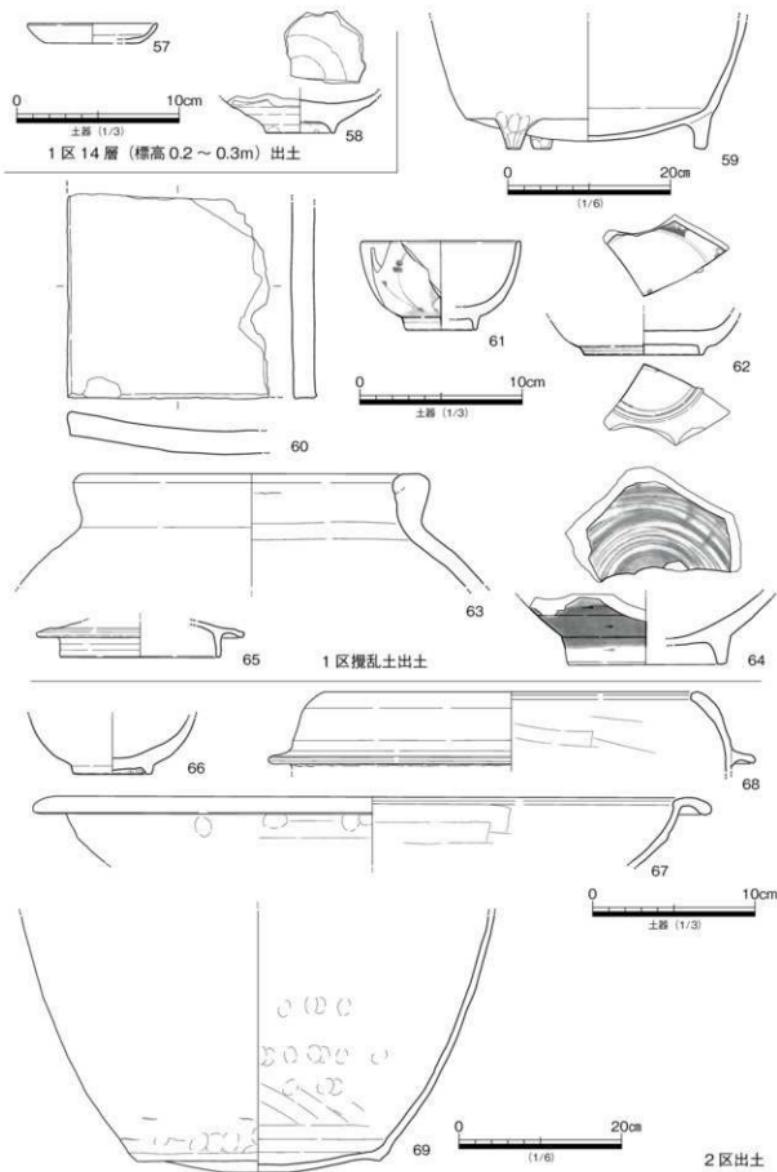
4. 遺構に伴わない遺物 (第 18 ~ 20 図)

1 区出土遺物

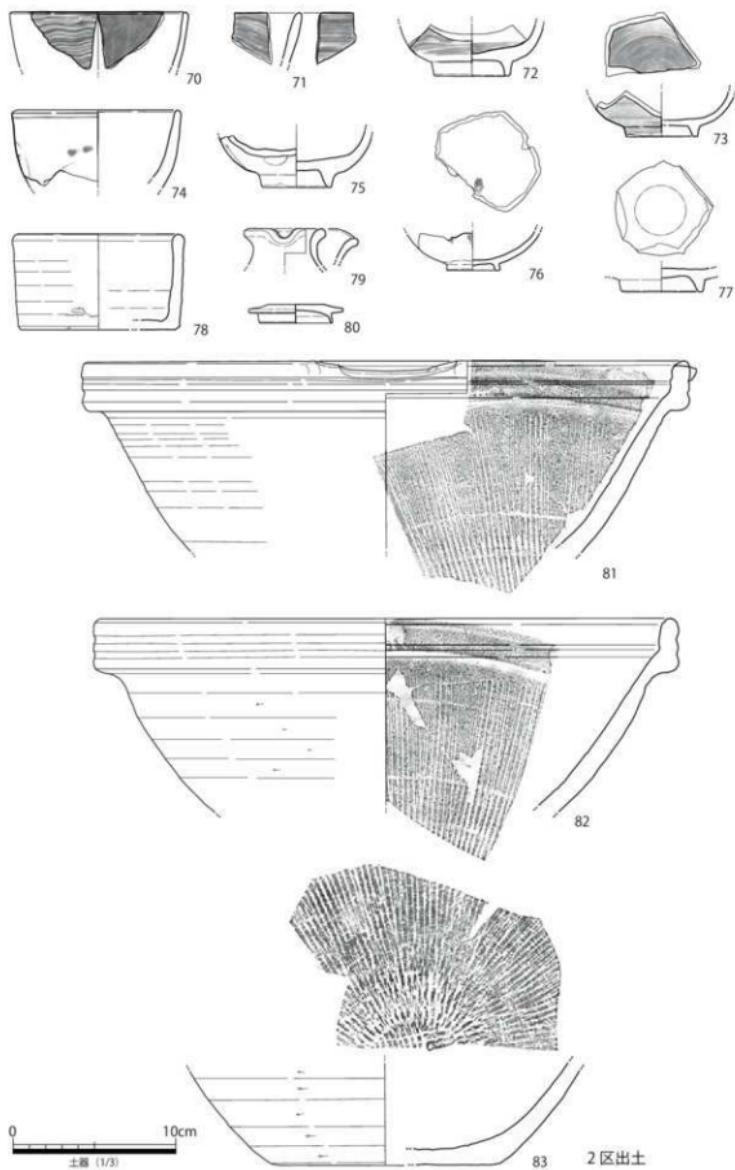
57 ~ 58 は 1 区の標高 0.2 ~ 0.3 m に堆積する黄灰色粘質シルト混り細砂層 (14 層) から出土した遺物である。57 は土師質土器小皿で、13 世紀のものである。58 は肥前陶器皿で、見込み蛇の目釉剥ぎが施される。17 世紀末から 18 世紀前半のものである。59 ~ 65 は擾乱土から出土した遺物である。61 は肥前磁器碗、62 は肥前磁器皿で、18 世紀後半、64 は肥前陶器刷毛目鉢で、18 世紀前半のものである。

2 区出土遺物

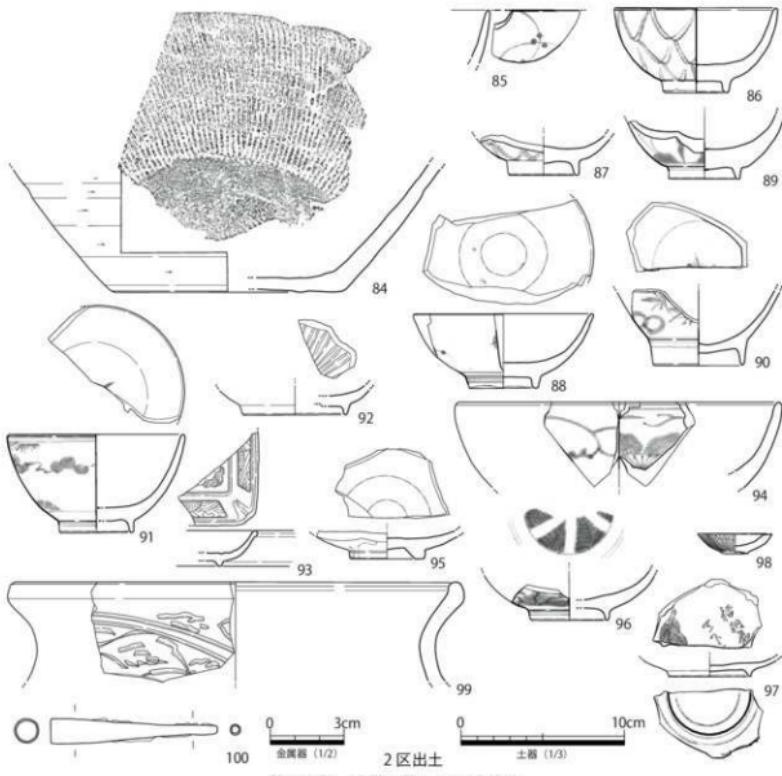
66 ~ 100 は 2 区の擾乱土・造成土や江戸時代の遺構の検出面である炭化物を多量に含む黒褐色小礫混り細砂層 (23 層)、その下層の 24 ~ 27 層から出土した遺物である。66 ~ 73 は陶器碗で、標高 0.5 m の 27 層上面の精査中に出土した遺物である。66 は内外面に灰釉が施される。豊付けは無釉であるが、高台内は施釉され、砂目積の痕跡がみられる。肥前産で、17 世紀後半のものである。73 は肥前陶器刷毛目碗で、色調が薄い。17 後半から 18 世紀前半のものである。67 ~ 72・74 ~ 100 は 23 層及び擾乱土・



第18図 遺構に伴わない遺物 1



第19図 遺構に伴わない遺物2



第20図 遺構に伴わない遺物3

造成土から出土した遺物で、18世紀から19世紀代ものである。70～72は肥前陶器刷毛目碗で、暗褐色を呈する。18世紀前半のものである。74・75は肥前産の陶胎染付碗で、18世紀前半のものである。76は京焼で、外面に赤色、底部内面に緑色の釉が施される。75は肥前陶器皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎがある。78・79は備前焼で、79は鶴口の徳利である。81～84も備前焼の擂鉢で、81・82は18世紀のものである。85は肥前系で、18世紀後半から幕末のものである。86・87は肥前の二重網目文磁器碗で、18世紀後半のものである、88は肥前系の磁器碗で、見込み蛇の目釉剥ぎが施される。19世紀代のものであろう。90は肥前系の広東碗で19世紀前半のものである。92は肥前系の白磁皿で、型打ち技法である。底部は蛇の目凹形高台である。19世紀前半のものであろう。95は肥前磁器皿で内面には見込み蛇の目釉剥ぎ、外面体部は灰釉、下部から底部は無釉である。17世紀末から18世紀のものである。99は肥前産の青磁で、17世紀後半から18世紀前半のものである。98は磁器紅皿である。型押し成形で、19世紀代のものである。

第4節 動物遺存体

広島大学総合博物館 石丸恵利子

はじめに

本町二丁目遺跡は香川県坂出市本町に所在し、都市計画道路事業富士見町線に伴い発掘調査が行われた。平成29年度の試掘1・4・10トレンチ（以下、トレンチ名のみ表示）および平成30年度の1・2区（以下、区名のみ表示）において貝類と骨類が採集され、巻貝（腹足綱）14種1,201点、二枚貝（二枚貝綱）12種176点、哺乳類（哺乳綱）2種4点の計1,388点が確認された（第1・2表）。そのほか、フジツボ類も7点確認された。

現在の坂出市街地の北部は、坂出塩田と呼ばれる江戸時代後期の干拓地で、本遺跡の北端において干拓以前の護岸と伝えられる石垣があり、調査区内からは17世紀後半の遺物や18世紀後半から19世紀の遺構・遺物が出土している。また、中世までは遺跡の南600mまで干潟が広がる場所であったとされる（木下2009）。これらのことから、出土動物遺存体は中世以降明治期までに利用された動物資源あるいは近隣海域の生息貝類や環境を理解する上での貴重な資料だと言える。

資料はすべて現場で目視によってピックアップ採集されたものである。以下、確認された種類とその特徴を記す。種名表記については、奥谷（2017）および遠藤・千石（2004）に従い、各貝種の生息域は日本列島近海の地域のみ記した。また、食材としての利用や調理法については藤原（2011）や藤原（2015）を参照した。

1. 動物遺存体の種類

（1）貝類

イボキサゴ 1トレンチで1点、10トレンチで3点、1区で4点の計8点が確認された。北海道南部から九州の潮間帯付近の内湾干潟に生息する。冬から春にかけて干潟に群集しており、容易に獲得できたと考えられる。キサゴ類には、より大型で外洋に面した砂地に生息するダンベイキサゴや内湾の砂地に生息するキサゴが含まれるが、これら2種は確認されなかった。いずれの種も茹で物や煮物として食すことができる。キサゴ類は「おはじき」の元になったとされ、人びとにとって昔から身近な巻貝であったと言える。

サザエ 2区のSK212で蓋を1点のみ確認した。殻体部分は確認されなかった。蓋の長径は3.5cmを測り、殻高約9cm前後のものであったと推測される。サザエは、北海道南部から九州、朝鮮半島の潮間帯下部から水深20m程度の浅い岩礁域に生息する。食用となり、一般的によく知られた巻貝である。

スガイ 1トレンチで1点、1区で1点の計2点が確認された。北海道南部から九州南部の潮間帯岩礁域に生息する。蓋は硬いが身は取り出しやすく、茹でたり煮たりして食すことができる。蓋を酢の中に入れると溶けてくることから酢貝と呼ばれる。海辺で普通に見られる代表的な種である。

ウミニナ 1トレンチで55点、10トレンチで55点、1区で75点、2区で1点の計186点が確認された。北海道南部から九州までの日本各地の干潟や潮間帯の泥底に生息する種で、食用になる。近年、海岸の環境変化によって認められなくなった場所もあるとされるが、干潟に群集する一般的な種のひとつである。ウミニナ科には以下に記すホソウミニナやイボウミニナが含まれるが、殻口の滑層瘤が大きいのがウミニナの特徴である。

ホソウミニナ 1トレンチで8点確認された。日本全国の外海の干潟、岩礁の泥底や小石などがある砂地に生息し、ウミニナよりもやや外海的な環境を好む種である。殻口外唇が張り出さず、滑層瘤の発達が悪いことで、ウミニナと区別できる。

イボウミニナ 1トレンチで15点、10トレンチで99点、1区で31点の計145点が確認された。北海道南部以南のやや開放的な内湾の潮間帯中部から下部の泥底に生息する。細長く、殻頂は尖る。殻口外唇の肩部は角張り、上部に湾入があるのが特徴で、肋間が螺肋より広いことがウミニナやホソウミニナと異なる。

フトヘナタリ 10トレンチで1点、1区で4点の計5点が確認された。松島湾から九州の内湾潮間帯で、小石の間やアシ原の泥上に生息する。ウミニナ類と比較して、以下に記すヘナタリやカワアイを含むキバウミニナ科は、川の水が混じるようより塩分の少ない環境を好むとされる。殻表には多くの明瞭な螺肋と弱く細い縫肋をもち、殻口は外唇が太く反転し、前端の水管の発達が弱いのが特徴である。

ヘナタリ 卷貝のうちもっとも多く確認された種で、10トレンチで307点、1区で88点の計395点が確認された。房総半島・能登半島から沖縄の汽水域、潮間帯、内湾の干潟に生息する種で、殻口が大きく外側に広がり、前端は水管溝を超えて伸び、また殻底部は角張っているのが特徴である。

カワアイ 1トレンチで3点、10トレンチで11点、1区で14点の計28点が確認された。松島湾・山口県北部から台湾までの内湾潮間帯や汽水域の干潟に生息する。体層の縫張肋が弱く、殻口前端の張り出しも弱い。また、縫合下とその次の螺溝の深さが同じであるのが特徴である。ウミニナ科同様に、キバウミニナ科も干潟で一般に認められる種であるが、これらの種は近年絶滅危惧種や準絶滅危惧種に指定されるなど生息地が減少している。

オオヘビガイ 1区で1点のみ確認された。北海道南部以南から九州までの潮間帯や岩礁礁の岩や石などに固着する種で、食用になるとされる。

ツメタガイ 1区で2点、2区で21点の計23点が確認された。北海道南部以南の内湾の潮間帯から水深50mの細砂底に生息し、食用とことができる。アサリやハマグリなどに孔をあけて食べる肉食性の貝である。

アラムシロ 1トレンチで2点、10トレンチで12点、1区で2点の計16点が確認された。北海道南部以南の河口域干潟などの潮間帯泥底に生息する。腐肉食性で、バイ類とともに海のそうじ屋の役割をもつ貝類のひとつである。

アカニシ 1区で3点、2区12点の計15点が確認された。北海道南部以南の水深30m以浅の砂泥底に生息し、他の貝を食べる肉食性の貝である。味の良い大型の巻貝として、古くから海辺では盛んに食べられてきた。

テングニシ 2区で5点確認された。ほかにもテングニシの可能性がある破片2点が確認されている。房総半島以南の水深10から15mの砂底に生息する肉食性の貝である。食用となる。うちわ状の卵嚢は「ウミホオズキ」として知られる。ほとんど見られなくなつたが、かつては卵嚢から卵を抜いて乾燥させたものに色をつけるなどして、音を鳴らす遊び道具として利用されており、身近な貝であったと言える。

上記の巻貝以外に、欠損や表面の摩減などで種を確定できなかつたが、ウミニナやイボウミニナなどのウミニナ科あるいはヘナタリなどのキバウミニナ科の可能性があるものや種不明の巻貝が計354点確認されている。

サルボウ 2区で1点のみ確認された。東京湾から有明海の潮間帯上部から水深20mの砂泥底に生息し、

放射肋は32本前後を数える。岡山や山陰では「アカガイ」と呼んで現在でもよく食されている。同じフネガイ科に属するアカガイの放射肋は42本前後で、サルボウと区別できる。

ハイガイ 1区で1点、2区で2点の計3点が確認された。2区のうち1点は左右の揃った同一個体（合わせ貝）であった。伊勢湾以南の潮間帯から水深10mの泥底に生息し、放射肋は18から20本を数える。食用となり、縄文時代の貝塚などで多く確認され、昔から多く食された種であるが、日本近海では、現在有明海などの一部でしか確認されなくなるなど、干渉の減少などにより数を減じている。殻を焼いて貝灰の原料として使用されたことから灰貝と呼ばれている。

イタボガキ科の一種 4トレンチで2点、10トレンチで1点、1区で42点、2区で7点の計52点が確認された。破片であるため種は確定できていないが、マガキやイタボガキなどのイタボガキ科の一種と考えられる。マガキは日本全土の汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底で岩や礁に、イタボガキは房総半島以南の水深3~10mの内湾砂礫底に、また、イワガキは陸奥湾から九州の潮間帯の岩礁にいずれも礁や岩に付着して生息する。いずれも食用となる。イタボガキの可能性が高い破片が複数確認できる。

ハボウキガイ科の一種 1トレンチで2点確認された。ハボウキガイあるいはタイラギの可能性があるもので、ハボウキガイ科の一種とした。ハボウキガイは房総半島や能登半島以南の水深50mまでの砂泥底に、タイラギは福島県や日本海中部以南の水深30mまでの泥底に、いずれも尖った殻頂を下に海底に突き刺さるように生息している。タイラギは瀬戸内海や有明海で多く認められる。食用となる。

ヤマトシジミ 1トレンチで3点、2区で1点の計4点が確認された。本州から九州の河口の汽水域の砂底に生息する。食用となる。

ヒシガイ 10トレンチで4点確認された。本州房総半島以南や九州の潮間帯中部から水深20mの砂底に生息し、殻は小型で、殻表には瘤をそなえた21本前後の放射肋で覆われる。亜四角形で膨らみが強いのが特徴である。1cmに満たない小型種であることや、遺跡から多く出土する例はほとんどないため、食用となった可能性は低いと考えられる。

アサリ 1区で2点、2区で4点の計6点が確認された。アサリは、北海道から九州の潮間帯中部から水深10mの砂礫泥底に生息し、潮干狩りの代表的な種で、現在最も多く食べられている種の一つである。

ハマグリ 10トレンチでハマグリの可能性がある破片が1点のみ確認された。殻長15cm程度の小さなものである。ハマグリは北海道南部から九州の潮間帯下部から水深20mの内湾の砂泥底に生息する。ハマグリは、遺跡によってはヤマトシジミやアサリなどと並んで主体を占めることが多い種であるが、これら3種が多いとは言えない出土状況である。そのほか、2区で殻頂部を欠く殻体部片を2点確認しているが、ハマグリに似るが判断できなかったためマルスダレガイ科の一種とした。

オキシジミ 二枚貝の中で最も多く確認された種で、1トレンチで2点、10トレンチで39点、1区で19点、2区で6点の計66点が確認された。房総半島から九州の潮間帯下部から水深20mの砂泥底に生息し、食用となる。オキシジミが主体を占める遺跡の報告例は少ない。現在、日本ではあまり多く利用されないが、韓国や中国では広く利用されている。

イチョウシラトリ 1区で2点、2区で2点の計4点が確認された。2区のうち1点は同一個体（合わせ貝）である。北海道南西部以南の内湾の湊奥部や河口部の潮間帯中下部の泥底に生息する。丸みを帯びた三角形から卵形で、膨らみは弱い。後背縁は直線的で殻頂から後腹縁へ明瞭な稜が走るのが特徴である。

シオフキ 10トレンチで1点のみ確認された。宮城県以南、四国、九州の潮間帯下部から水深20mの砂泥底に生息する。殻は薄質でよく膨らみ、殻表には低い同心円肋が発達するのが特徴である。

上記の二枚貝以外に、破片を含めて種を同定できなかったものが30点あり、その他、フジツボ類も7点確認されている。

(2) 哺乳類

ネコ 2区の中世以前の細砂層より尺骨右が1点確認された。イエネコは大陸から渡來した動物であるが、最古の出土例としては弥生時代中期のカラカミ遺跡の報告があり、古代や中世には出土例の増加が認められる。近世の武家屋敷や町屋跡などでは多くの報告があり、香川県内では高松城跡で出土が確認されている。

ウマ 2区において中世以前の側溝と細砂層より桡骨・尺骨左1点と基節骨1点が確認された。基節骨はやや欠損が認められるため前肢か後肢かは不明であるが、左肢であり桡骨・尺骨と同一個体である可能性が高い。そのほか、大型哺乳類の下顎骨の下顎体破片も1点出土しており、大きさからウシあるいはウマである可能性が高い。ウマは、甲府市の塩部遺跡出土の古墳時代の資料が最古とされ、香川県内では旧練兵場遺跡で多くの資料の出土が報告されている（石丸2013）。

2. トレント・区ごとの出土動物相

出土動物相全体を通して見ると、ヘナタリやウミニナなどの内湾干潟に生息する貝類が最も多く確認され、内湾の砂礫や岩礁域のイタボガキあるいはマガキなどのイタボガキ科もやや多く含まれていることが示された（第2表）。以下、調査区ごとに比較してみたい。

1トレント 1トレントは干拓以前の護岸の石垣北側の干拓地に当たる部分で、12種類193点の貝類が確認された。ウミニナが55点と最も多く、イボウミニナ15点、ホソウミニナ8点、ヘナタリ9点がそれに続き、摩滅等のため種を確実に同定できないウミニナ類も89点を数える（第3表）。いずれも内湾干潟に生息する種で、同様な環境に生息する種として、他にカワアイやオキシジミ、アラムシロなど8種、シルト・泥底のアカニシと考えられる破片とタイラギと考えられるもの、岩礁域に生息するスガイ、汽水域のヤマトシジミも少量確認された。

4トレント 4トレントは1トレントより南に約30mの場所に位置する。イタボガキ科の一種が2点のみ確認された。

10トレント 10トレントは1トレントより南に約230mに位置し、動物遺存体が出土した調査地点の中で最も多くの貝類が採集されている。1トレント同様にウミニナやヘナタリなどの干潟に生息する種が主体となり、12種732点が確認された（第4表）。干潟の種以外に、シオフキやヒシガイなどの内湾砂底に生息する種も少量確認された。最も多いのはヘナタリの307点で、イボウミニナ99点、ウミニナ55点がそれに次ぎ、二枚貝ではオキシジミも39点確認されている。

1区 1区は4トレントの約20m南に位置する調査区で、擾乱層や側溝などから15種計370点が出土している。側溝からは他の調査区同様にヘナタリやウミニナ、イボウミニナなどの干潟に生息する種を主体に13種が確認された（第5表）。その他の種としては、SK101（明治時代）でアカニシ1点と擾乱層でオオハビガイ1点を確認することができた。遺構からの出土は少量で、SD103（江戸時代後期）からイタボガキあるいはマガキと考えられるイタボガキ科の破片4点が出土している。

2区 2区は4トレントの西側に隣接した調査区で、土坑や擾乱層などから11種の貝類と2種の哺乳類が計89点確認された（第6表）。全体の出土量は、1区と比較して4分の1程度と少量である。ツメタガイが21点と最も多く、アカニシ10点、オキシジミ6点がそれに続き、他の調査区とは主たる貝種が異なる状況がうかがえる。少量ではあるが、ネコとウマが確認されている点でも特徴が異なる。

2区では複数の遺構が検出されているが、SK201（19世紀）においてアカニシ2点、テングニシ1点、イタボガキ科の一種（イタボガキもしくはマガキ）1点、マルスダレガイ科の一種1点が確認され、SK202（19世紀か）ではツメタガイが1点確認されている。また、SK212（19世紀）からはサザエの蓋が1点出土している。

3. 出土貝類から復元される海辺の環境と資源利用

以上のように、ピックアップ方式による採集にもかかわらず、26種の多様な貝類を確認することができた。最も多く確認されたのはヘナタリで、ウミニナやイボウミニナなどの内湾干潟に生息する種が主体となり、内湾砂底に生息するアカニシやハボウキガイ科や内湾砂底のサルボウやシオフキなど、また内湾岩礁域のサザエやスガイなども確認することができた（第2表）。また、河口域に生息するヤマトシジミも確認されることから、遺跡近くの海辺には内湾干潟が広がり、近隣には河川の流れ込みや砂底や岩礁の環境も存在したと推測される。

これまでの周辺の発掘調査や絵図などから、本遺跡付近は戦国時代から江戸時代にかけて浜堤上に形成された坂出村の集落部分に相当することが明らかとなっている。そのため、出土貝類は当時坂出村に暮らした人々が食料として利用した残滓である可能性がある。なお、本遺跡周辺で近世の動物遺存体が出土した遺跡としては、丸亀城跡（大手町地区）と高松城跡（高松北警察署）があげられるが、いずれも城下町の上級武家屋敷地にあたる。丸亀城跡ではアサリを主体にアカニシが多く、ハマグリやサザエなど11種が確認され（石丸2018a）、高松城跡ではヤマトシジミとアカニシが主体となり、ハマグリやサザエも多く、サルボウやウミニナなど21種が確認されている（石丸2018b）。これらと比較すると、本町二丁目遺跡の種数は26種と多いものの、主要な貝類組成が大きく異なることが指摘できる。遺構から出土したものは少なく、多くが搅乱層や試掘トレンチで採集されたものであるため、それぞれの資料が食料残滓か浜堤形成時の自然貝層に含まれていたものかは判断が難しいが、集落地にアサリやアカニシ、ヤマトシジミ、ハマグリ、サザエなど城下町で多く出土する食料資源が少量であることは特徴として指摘できよう。また、本遺跡出土貝類の多くが食料資源であったとするならば、塩田や田畠での耕作を生業とする集落、また港や番所の暮らしでは、干潟に生息するヘナタリやウミニナなどの小型の巻貝を主体とした資源利用であったことがうかがえる。

以上のように、本遺跡出土動物遺存体の考察によって、近世において塩田や田畠、また港や墾田によつて形成された村での動物資源利用を知るうえで、また当時の海域環境を知るうえでの貴重な情報が得られたと言える。今後周辺の調査が進み、多くの動物遺存体が採集されることを期待したい。

参考文献

- 石丸恵利子 2013 「旧練兵場遺跡第22・23・25次調査出土の動物遺存体と動物資源利用の様相」『旧練兵場遺跡Ⅲ（第三分冊）』独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財調査報告第3冊、香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院、212-236頁
石丸恵利子 2018a 「丸亀城跡（大手町地区）出土の動物遺存体と資源利用について」『丸亀城跡（大手町地区）』高松地裁丸亀支那合新官工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告、香川県教育委員会・最高裁判所、170-176頁
石丸恵利子 2018b 「高松城跡（高松北警察署）出土の動物遺存体からみた上級武士の動物資源利用」『高松城跡』香川県警察高松北警察署建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告、香川県教育委員会、133-169頁
遠藤秀紀・千石正一監修 2004 「改訂新版 世界文化生物大図鑑 動物 哺乳類・爬虫類・両生類」世界文化社
奥谷尚司著 2017 「日本近海貝類図鑑」第二版、東海大学出版部
木下晴一 2009 「木太中村遺跡 文京町二丁目西遺跡」都市計画道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告、香川県教育委員会
富岡直人 1999 「貝類」『考古学と自然科学②考古学と動物学』同成社
藤原昌高 2011 「地域食材大百科第5巻魚介類・海藻」農山漁村文化協会
藤原昌高 2015 「美味しいマイナー魚貝図鑑」株式会社マイナビ

第1表 本町二丁目遺跡出土動物遺存体種名一覧

門	綱	目	科	属 / 標
軟体動物門 Mollusca	腹足綱 Gastropoda	古腹足目 Vetigastropoda	ニシキウズガイ科 Trochidae	イボキサゴ <i>Umbonium montiferum</i>
			タービニア科 Turbinidae	サザエ <i>Turbo cornutus</i>
		新生腹足目 Caenogastropoda	ウミニナ科 Basiulariidae	スガイ <i>Basiularia multiformis</i>
			キバウミニナ科 Potamididae	ウミニナ <i>Basiularia zonalis</i>
				ホリウミニナ <i>Basiularia utramontaria</i>
				イボウミニナ <i>Cerithidea moserchi</i>
				ヘナタリ <i>Pirella nipponica</i>
				<i>Pirella pupiformis</i>
			ムカデガイ科 Vermetiidae	カワツアイ <i>Thylacodes adamsii</i>
			タマガイ科 Naticidae	オオベビガイ <i>Glossaulax didyma</i>
二枚貝綱 Bivalvia	アコイ目 Arcida	ムシロガイ科 Nassariidae	アラムシロ <i>Nassarius festivus</i>	
		アツキガイ科 Muricidae	アカニシ <i>Rapana venosa</i>	
		テングニシ科 Melongenidae	テンゲニシ <i>Hemifusus tuba</i>	
			フネガイ目 Arcoida	アコイ <i>Scapharca lagooshimensis</i>
				ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i>
		ウグイスガイ目 Pteriomysida	イタボガキ科 Ostreidae	イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i>
				マガキ? <i>Crassostrea gigas</i>
			ハボウキガイ科の一種 Pinnidae gen. et sp. indet.	
脊椎動物門 Vertebrata	哺乳綱 Mammalia	マルスダレガイ目 Veneroida	シジミ科 Corbiculidae	ヤマシジミ <i>Corbicula japonica</i>
		ザルガイ科 Cardiidae	ヒシガイ <i>Fragum banno</i>	
		マルスダレガイ科 Veneridae	アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	
			ハマカリ?	<i>Meretrix fusoria</i>
			オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>	
		ニッコウガイ科 Tellinidae	イチヨウシラトリ <i>Pistris caprodes</i>	
		バカガイ科 Mactridae	シオフキ <i>Mactra veneriformis</i>	
		食肉目 Carnivora	ネコ科 Felidae	ネコ <i>Felis catus</i>
		奇蹄目 Perissodactyla	ウマ科 Equidae	ウマ <i>Equus caballus</i>

種名表記については、奥谷編（2017）、遠藤・千石監修（2004）に従った。

第2表 本町二丁目遺跡出土動物遺存体の生息環境区分と資料数

生息域	貝類							堆積
	汽水	内湾	干潟	シルト・泥炭	砂底	岩礁	苔類	
陸域	河口・潮間帯							
	干潟	アカニシ: 16 〔イタボガキ〕: 186	アカニシ: 16 〔イタボガキ〕: 15	〔ウミニナ〕: 16 〔フネガイ〕: 15	〔ウミニナ〕: 1 〔イボキサゴ〕: 2 〔ハボウキガイ〕: 2	〔サザエ〕: 1 〔スガイ〕: 2 〔メタガイ〕: 1	〔イタボガキ〕	テンゲニシ: 5 〔サザエ〕: 1 〔スガイ〕: 3
		ホソウミニナ: 8 〔イボキサゴ〕: 8						
		〔フネガイ〕: 23 〔ハナタリ〕: 80						
		カワツアイ: 28 アラムシロ: 16 〔イボウミニナ〕: 145		〔アサリ〕: 1 〔シオフキ〕: 1 〔ハマカリ〕: 3 〔ヒシガイ〕: 4				
		〔アサリ〕: 6 〔マガキ〕						
		イチヨウシラトリ: 4 ハイガイ: 3 オキシジミ: 66						

*イタボガキ科についてはマガキとイタボガキの欄に記し、イタボガキに点数を記した。

**富岡（1999）を基に作成

第3表 試掘1トレンチの生息環境区分別出土動物遺存体

生息域	貝類							堆積
	汽水	内湾	干潟	シルト・泥炭	砂底	岩礁	苔類	
陸域	河口・潮間帯							
	干潟	アカニシ: 1? 〔ウミニナ〕: 55	アカニシ: 1? 〔ウミニナ〕: 2 〔イボキサゴ〕: 2	〔ウミニナ〕: 1 〔イボキサゴ〕: 1				
		ホソウミニナ: 8 〔イボキサゴ〕: 1						
		〔ハナタリ〕: 7						
		カワツアイ: 3 アラムシロ: 2 〔イボウミニナ〕: 15 オキシジミ: 2					〔スガイ〕	

*他に、不明巻貝（ウミニナ類）: 89、不明二枚貝: 4

第4表 試掘10トレンチの生息環境区分別出土動物遺存体

生息域	汽水 河口・潮間域	貝類						哺乳類 陸域
		干潟	内湾	砂底	岩礁	砂礫	沿岸砂底	
種類		<p>【ウミニナ】: 55 【フトヘナタリ】: 1 【イボガキ】: 3 <u>ハマカリ</u>: 307 カワアイ : 11 アラムシロ : 12 【ホウミンチ】: 99 (マガキ) オキシジ : 39</p>	<p>【ウミニナ】 【イボガキ】 (イタボガキ) : 1</p> <p>シオフキ : 1 ハマグリ : 1 ヒシガイ : 4</p>		(マガキ)			

*他に、フジツボ類: 7、不明巻貝（ウミニナ類）: 183、不明巻貝: 1、不明二枚貝: 7

第5表 平成30年度調査1区（側溝）の生息環境区分別出土動物遺存体

生息域	汽水 河口・潮間域	貝類						哺乳類 陸域
		干潟	内湾	砂底	岩礁	砂礫	沿岸砂底	
種類		<p>【ウミニナ】: 43 【フトヘナタリ】: 4 【イボガキ】: 2 <u>ハマカリ</u>: 58 カワアイ : 11 アラムシロ : 2 【ホウミンチ】: 16 【アサリ】: 1 (マガキ) イチョウシラトリ : 1 ハイガイ : 1 オキシジ : 8</p>	<p>【ウミニナ】 【イボガキ】 (イタボガキ) : 32</p> <p>[アサリ]</p>	<p>【スガイ】</p> <p>(マガキ)</p>				[スガイ]

*他に、不明巻貝（ウミニナ類）: 58、不明二枚貝: 1

第6表 平成30年度調査2区（全体）の生息環境区分別出土動物遺存体

生息域	汽水 河口・潮間域	貝類						哺乳類 陸域
		干潟	内湾	砂底	岩礁	砂礫	沿岸砂底	
種類	<p>セマトシジミ : 1</p> <p>【ウミニナ】: 1 アカニシ : 10 (イタボガキ) : 6 【ツメタガイ】: 20</p> <p>[アサリ] : 4 (マガキ) イチョウシラトリ : 2 ハイガイ : 2 オキシジ : 6</p>	<p>【ウミニナ】 アカニシ : 10 (イタボガキ) : 6 【ツメタガイ】 [アサリ] サルボウ : 1</p>		(イタボガキ)			テンダニシ : 4	<p>ホコ : 1 ウマ : 3</p>

*他に、不明巻貝（ウミニナ類）: 5、不明巻貝: 1、不明二枚貝: 13

* * 第2～6表の生息域は、富岡（1999）を基に作成した。また下線を引いた種は、各トレンチ・区の出土主要種である。

第7表 本町二丁目遺跡出土動物遺存体一覧

測量点	遺構名	時間	層位	出土年月日	動物遺存体の種類と点数
試掘4トレ				20870726	イボキサゴ：1点。スガイ：1点。ホソクニナ：8点。オボウミニナ：15点。ヘナタリ：7点。ウミナガ：55点。カラムシロ：2点。カワアイ：3点。不明亜目（ウミニナ類）：30点。不明亜目（アカニシ）：1点。ヤマトシジミ：左2点・右1点。オキシジミ：右1点・左1点。ハゴウキガ科の一種：2点。不明二枚貝：4点。
試掘4トレ				20870727	イタボガキ科の一種：2点
試掘4トレ				20870728	イボキサゴ：3点。ウミナガ：55点。オボウミニナ：99点。フトヘナタリ：1点。ヘナタリ：307点。カラアイ：11点。アラムシロ：12点。不明亜目：1点。ウミニナ類：183点。イタボガキ科の一種：1点。ヒシザギ：4点。ハマグリ：1点。オキシジミ：左18点・右21点。シオフキ：右1点。不明・枚貝：7点+破片。ツブリ類：7点
1区	雑乱土			20881119	イボウニナ：1点。ヘナタリ：1点。アカニシ：1点
1区	雑乱土			20881120	イボウニナ：1点。ツメザギ：1点
1区	雑乱土			20881120	イボキサゴ：2点。ウミナガ：32点。イボウニナ：12点。ヘナタリ：41点。カラアイ：3点。ツメザギ：1点。オボヘビガイ：1点。アカニシ：1点。不明亜目（ウミニナ類）：15点。イタボガキ科の一種：1点。カラアイ：右4点・左2点。左右不明：13点。アサリ？：左1点。オキシジミ：右6点・左5点。イチャウシガイ：1点。不明二枚貝：5点
1区	雑乱土			20881127	イタボガキ科の一種：左1点・小範囲：3点
1区	無清			20881128	イタボガキ科の一種：1点。カラアイ：1点。ハイガイ：左1点
1区	無清			20881128	ウミナガ：5点。イボウニナ：1点。フトヘナタリ：2点。ヘナタリ：9点。カラアイ：3点。ツメザギ：1点。オボヘビガイ：1点。オキシジミ：左1点
1区	無清			20881127	イボキサゴ：2点。カラアイ：2点。アラムシロ：2点。ウミニナ類：54点。アサリ：1点。イタボガキ科の一種：右1点・左2点。ツブリ：8点。オキシジミ：右3点・左3点・破片1点。イチャウシガイ：右1点。不明・枚貝：1点
1区	雑乱土			20881129	イボウニナ：1点
2区	雑乱土			20881204	ツメザギ：1点。オキシジミ：1点。ツメザギ：7点。テンゲニシ：1点。テンゲニシ：2点。不明亜目：2点。イタボガキ科の一種：左1点。オキシジミ：左1点・右2点。左右不明：1点。イチャウシトリ：右1点・左1点（同一個体）。サルガキ：左1点・右2点。ハイガイ：右1点・左1点（同一個体）。不明1点。ヤマトシジミ？：左1点。アサリ：左2点・右1点・右2点。不明二枚貝：左1点・右2点。不明8点。
2区	雑乱土			20881205	ウミナガ：1点。ツメザギ：7点。テンゲニシ：3点。不明亜目：2点。イタボガキ科の一種：左1点。オキシジミ：左1点・右2点。左右不明：1点。イチャウシトリ：右1点。2点
2区	23層上面			20881207	ツメザギ：3点。破片。カニシ：1点。イタボガキ科の一種：右2点・破片2点
2区	無清（細砂層 標高 50cm以下）			20881211	ツメザギ：1点。イタボガキ科の一種：右1点
2区	無清層（標高 0付近から0.3m）			20881212	ツメザギ：1点。アカニシ：1点
1区	SK101 明治時代			20881212	アカニシ：1点
2区	SK202 19世紀中			20881307	ツメザギ：1点
2区	SK201 19世紀			20881307	アカニシ：2点。テンゲニシ：1点。イタボガキ科の一種：右1点。マルヌダレガイ科の一種：破片2点
2区	SK212 19世紀			20881207	サザエの巣：1点
1区	SD103 江戸時代後期			20881127	イタボガキ科の一種：左2点・右1点・左右不明1点
2区	中世以前			20881211	ウマヅラガイ：左1点・右1点（同一個体）。ウマヅラガイ：右1点。不明・細胞骨（前後数不明）：左1点
2区	中世以前			20881212	ネコ足貝：右1点。不明亜目加下骨（ウマヅラ）：破片：1点

第4章 まとめ

坂出市街地には東西方向の浜堤が2例みられる。本町二丁目遺跡はそのうちの北側（海側）の浜堤に位置する遺跡である。遺跡北部の①区では浜堤堆積層の砂層から13～15世紀代の土器・陶磁器片が出土した。このことは、13～15世紀ごろこの付近で生活が営まれていたが、台風などの暴風時の波浪によって土砂とともに土器片が巻き上げられて堆積したことを見ている。

本町二丁目遺跡の南600mに位置する南側（陸側）の浜堤は、北側（海側）の浜堤よりも先行して形成されたと考えられる。この南側（陸側）の浜堤は古代まで形成が行われており、その北側は中世まで満潮時には海水が浸入する湿地が広がっていたことが文京町二丁目遺跡の調査でわかった。このことから、北側の浜堤の形成は古代遺構であり、13～15世紀ごろ活発に形成されたと考えられる。

この付近の地形環境は文献資料からもうかがわれる。江戸時代末に著された「民賊物語」には戦国時代、満潮時には南側の浜堤上の「津郷、福江の大通」を往来し、干潮時には北側の浜堤の「海中の州」を往来していたことが記されている。このことは、坂出沖には2本の浜堤があり、満潮時には海水が入り込んでいたことを示している。また、17世紀前半には播州からの移住した人々が、北側の浜堤に「すか」という集落を形成したことが「西光寺文書」などからうかがわれる。これらのことから、17世紀前半には北側の浜堤の形成は終了し、居住域として使用されていたと考えられる。

本遺跡の2区からは少量ながら17世紀後半の陶磁器片が出土しており、17世紀代にはこの付近が生活域であったことがうかがわれる。なお、2区からは18世紀後半から19世紀の遺構が数多く検出されており、同時期には付近に住居があったと考えられる。

また、本遺跡南部の1区南端では東西方向に走る江戸時代後半の溝が4条検出された。これらの溝の南側には市道西臨海宇多津線が東西に走る。この道は江戸時代後期の姿を描いた「坂出古図」（第5図）や「高松藩軍用絵図 阿野郡北緯図」（公益財團法人鎌田共済会郷土博物館が写図を所蔵）などに描かれており、古くから、宇多津から金山の北麓に向かう主要な道であったことがうかがわれる。1区の南部で検出された溝はこの道に平行していることから、道の側溝の可能性が高い。なお、これらの溝が検出されたのは標高0.3～0.5m付近である。溝の上部は削平されていると考えられるが、①区で検出された浜堤上面の標高は12mであることからも、これらの溝は浜堤斜面の下部に掘られたことがわかる。

なお、上記の絵図には、この道の南側に塩田が描かれている。この塩田は江戸時代末の干拓によって「西大浜」「東大浜」が築造されると廃絶された。試掘調査の結果、この付近からは遺構・遺物は検出されず、いずれの調査区でも標高0.2m付近まで擾乱土・造成土が堆積し、標高マイナス0.1～0.2m付近には黄褐色シルト混じり砂が堆積することがわかった。入り浜式塩田の塩田面は満潮・干潮時の水位の高さの中ほどに設定されることから、この砂層は塩田を構成する砂の可能性が高い。

以上のように、本遺跡の調査ではこの付近の旧地形や、江戸時代の土地利用についての手がかりをつかむことができたが、浜堤の形成時期や坂出市街地の地形の変遷については今後とも調査を進める必要があろう。

第8表 遺物觀察表



試圖1 トレンチ 江戸時代石組検出状況 東から



①区土層堆積状況 南から



①区土層堆積状況 東から



1区南部道路検出状況 東から



1区SD101 検出状況 東から



2区盪模検出状況 南から



2区造構検出状況 南から



2区西壁土層堆積状況 南東から





報告書抄録

ふりがな	ほんまちにちょうめいせき						
書名	本町二丁目遺跡						
副書名	都市計画道路事業富士見町線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	森下友子 木下晴一						
編集機関	香川県埋蔵文化財センター						
所在地	〒 762-0024 香川県坂出市府中町 5001-4 TEL 0877-48-2191 FAX 0877-48-3249						
発行年月日	2019年 11月 29日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m ²	
ほんまちにちょうめいせき 本町二丁目遺跡	さかいでほんまちにちょうめ 坂出市本町二丁目	37203		34° 18' 54"	133° 51' 04"	20170724 ~ 27 20171102 ~ 07 20180205 ~ 06 20181112 ~ 1218	本調査 1,095
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
	集落	江戸時代	土 坑、柱 穴、溝	土師質土器、陶磁器			
	本町二丁目遺跡は坂出市街地にみられる2本の浜堤のうち、北側（海側）の浜堤に位置する遺跡である。発掘調査の結果、浜堤堆積物の砂層から13~15世紀の遺物が出土したことから、同時期には浜堤の形成が行われていたと考えられる。また、本町二丁目遺跡からは17世紀後半の遺物や、18世紀後半から19世紀の遺構・遺物が数多く検出されており、同時期にはこの付近が居住域であったことがわかり、この付近の地形や土地利用の変遷についての手がかりをつかむことができた。						

都市計画道路事業富士見町線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

本町二丁目遺跡

2019年11月29日

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行 香川県教育委員会
印刷 ナカハタ印刷株式会社